

外陣講義文書

「第1講義文書」
(0=0 プロベイショナー)

第3章

カバラ的宇宙観

- 1 何故魔術師はカバラを学ぶか
 - 2 カバラ的宇宙における魔術師の座
 - 3 生命の木と四界
 - 4 カバラの歴史
 - 5 呼吸の基礎
 - 6 リズム呼吸（四拍呼吸法）
 - 7 位階のサイン
 - 8 日 拝
 - 9 瞑想とは何か
 - 10 サイコドラマ
- 瞑想課題：マントラ瞑想

THE OFFICIAL ORGAN

OF

I::O::S::

PUBLICATION IN CLASSES C~D

IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::

First published in 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).

Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013/2015 (ver.6.1).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005, 2013 and 2015

知識講座

1 何故魔術師はカバラを学ぶか

魔術がひとつの学問体系であることは既に述べた。学問であるからには、寄せ集めの知識の集合体ではない。それら一見して雑多な概念の集団に見えるものの中に、1本の筋が通っていないなければならない。なにしろ、西欧神秘学の総ての体系を網羅するかに見える膨大なシステムである。もし、その総ての概念を説明できる合理的な物差しがなければ学問ではなく、古伝を収めた倉庫に過ぎない。その物差しこそカバラである。

別な表現を使えば、東洋に於いてヨガ・スートラ、ウパニシャッド、バガバッド・ギーターなどの経典が果たしているのと同じ役割を、西洋の伝統ではカバラの経典が果たしている。魔術師はカバラの視点で魔術を、或いはこの世界そのものを理解して、整理しているのだ。

ユダヤ神秘主義の学問的分類ではカバラは、スペインで12世紀頃に成立した。しかし、ここではより広範囲の秘教的分野を示す用語として広義の「カバラ」を用いる。

広義のカバラの起源は人間の歴史そのものと等しく古いとも言える。また、ごく最近に浮上した伝承でもある。カバラの精神そのものは、予言者たちが神の声を聞いたとき、民衆に伝えるべきものと、霊的指導者の間でのみ伝承すべきものを分けたときに初まる。一般に、律法の魂はタルムードであり、タルムードの魂はカバラであると言う。それは顕すべきものと隠すべきものを分けたときに発生した区分である。しかし、当然ながら多くの人々には存在そのものが秘密であり、選びぬかれた賢者にのみ知らされた秘密の伝承が、どのように伝えられてきたか明らかにすることはできない。神殿崩壊以前のイェルサレムでは、大神官から大神官への口伝として伝承されたし、秘伝研究の盛んだった12、13世紀のスペインでは33歳を過ぎた熱意あるユダヤの男子はカバラの研究を許された（それ以前の年齢では禁止されていた）。しかし、現代の我々には数少ない伝承と、焚書、略奪、散逸を免れた少数の書物で往時の姿を知るしかない。

伝承によると、人にカバラを伝えたのは最も神に近い大天使メタトロンであると言う。源初るとき、神の書記メタトロン（その前身は長老エノク）が、恍惚状態、或いは瞑想状態の人間の心に現れて秘密の教えを告知した。この知識はあまりにも神聖であったので、師の口から弟子の耳にのみ伝えられた。

別の伝承によれば、現在の旧約聖書に編集された「成文律法」に対して、啓示されない「口伝律法」が存在するという。「口伝律法」がいわゆるカバラであり、そして両者を統合する完全な律法、「未開示律法」が神の前に白い火のうえに黒い火となって燃えているという。

カバラはヘブル語では קבלה (QBLH) と綴られる。その語源は、קבל (QBL、キベル、受けとる) である。従って、口伝で受け取られるもの、「口伝の伝承」という意味である。同じ伝承でも、映画「屋根の上のヴァイオリン弾き」においてユダヤ人の牛乳売りが叫ぶ「伝承」(Tradition)は רשררה (RSRRH)、つまり、一般の「伝承」である。

「口伝の伝承」とただの「伝承」では、啓示されるものの重みが違う。

われわれが学ぶQBLHは、人生を賭して追及すべき秘教神学である。カバラの碩学は、修行者が「受けとる」のは、創造主の与える「存在」であるとした。しかも、受けとり方にも段階があり、「受けとるために受けとろうとする」最初の段階、「受けとるために与えようとする」より進歩した段階、「与えるために与えようとする」神秘的な段階、「与えるために受けとろうとする」最終段階と進化し、四段階を乗り越えて創造主との統一に進むのだという。⁽¹⁾

教えが口伝のみで伝承されるなら、カバラの文献など有り得ない。多くの無名の師匠たちから弟子たちへ、長い年月「教え」が継承されていった。しかし、広範な教育の必要性から、また理解困難な師家の言葉を失伝してしまうことを恐れた弟子たちの畏敬と恐怖が、師家の言葉を文字にして残すという矛盾に結実した。そのため、十二世紀頃からカバラ及び他のユダヤ神秘主義の

(1) レオン・アシュケナジ「カバラ思想における魂と創造の関係」『意識の遍歴』(コルドバ国際シンポジウム全レポート/科学と意識シリーズ4) たま出版、1987年、120、121頁。

伝承の一部が書物の形で世に出る事となった。作者は当然ながらユダヤ人である。

アブラハム・アブラフィア、ヨセフ・ギカティラ、モーセ・デ・レオン等の著々たる著作群から、アシュケナージ・ハシディズムの『敬虔者の書』(セフェル・ハシディム)など比較的知られていないものまで多々存在する。

これに遅れてルネサンス期に入るとピコ・デッラ・ミランドラ、クノール・フォン・ローゼンロス、ネットスハイムのアグリッパなどのキリスト教徒のカバリストたちが、ヘブル語の古文献を西欧の言語であるラテン語に翻訳し、紹介していった。⁽²⁾ キリスト教カバリストのなかでは、中世イタリアのフィレンツェ貴族ミランドラ (Giovanni Pico della Mirandola 1463-1494) は特別な位置を占める。かれはコジモ・デ・メディチが有名な「プラトン・アカデミア」を開いた翌年に生まれ、16歳のときから断続的にアカデミアで学んだ。そして、1487年に『提題』(Conclusiones)を出版したが、内容が異端的であると糾弾され、実際に教皇イノケンティウスに異端宣告を受け入牢することになる。フィレンツェのロレンツォ・デ・メディチの取りなしで出獄したかれはメディチ家の庇護の下に短い生涯を終える。

ミランドラは、次のように語る。

「人間は、さまざまで、多様で、しかも定まらない本性をもつ動物である。」

(אָנוש הוּא שוֹנֵי וְכַמָּה מִכַּעוֹת בְּעַל הַי) ⁽³⁾

そして、また、「魔術の諸定理」(Magica theoremata)を考察すると二種類あり、一方はダイモネスの業と権威によるもので呪わしい存在である「妖術」(ゴエティア)だが、もう一方は正しく探求される限り自然哲学の絶対的完成を意味する「魔術」(マゲイア)である。

後者の代表として、ゾロアスターの魔術「神的なものどもの学問」(divinor scientia)と、クサルモシデスの魔術「精神の医術」(animi medicina)は、深い神秘に満ちた全自然の認識であり、神的で健全なものであると説明した。

また、カバラを別に論じ、次の三要素を含む神的な学問であるとした。

知性の水脈 (vena intellectus) → 超実体的な神性に関する言表し得ない神学

智慧の泉 (sapientiae fons) → 知性認識されうる天使的な諸形相に関する厳密な形而上学

知識の川 (scientiae flumen) → 自然的なものどもに関する最も強固な哲学

そして、『カバラ的提題』(Kabbalistic Coclusions: secundum secretam doctrinam sapientum Hebraeorum Cabalistarum)などの比較的コンパクトなカバラの解題を著述した。

かれの早世により、魔術とカバラの体系的な融合は後世の手にまかされた。しかし、ミランドラの蒔いた種は確実に実ったのである。

このカバラのラテン語訳の時期と、西欧魔術の体系化の時期は、ほぼ一致している。むしろ、公開されたカバラ思想をもとに魔術が再構築されたと考えて良い。神～天使～人間～魔物～悪魔という階級構造が、ヘブル語の名前を基軸に構成され、魔術の書物に書き込まれた。カバラの宇宙生成論、構造論が魔術師の思想の中核となり、エジプトやグノーシスの思想が、カバラを中心に再構築されていく。それはカバラ魔術という新しい言葉を生んだ急速な魔術システムの進化であったが、同時にカバラそのものの概念も普遍化し、ヘルメス学という錬金術的統合の学問が創造された。19世紀において、魔術とヘルメス学は同義語だった。しかし、今日ではヘルメス学は、グノーシスの学問を指す語感が強くなっている。

むしろ、統合の学としては魔術の語をあてたほうが相応しいであろう。

(2) ユダヤ教神秘主義に関する学問的研究によれば、初期カバラは、12世紀～13世紀に南仏プロヴァンス地方及びスペインにおいて開花したとされる。2、3世紀頃のメルカバ神秘主義、メルカバ及びヘハロース文書群については、通常カバラに分類しない (Joseph Dan, *The Early Kabbalah*, New York: Paulist Press, 1986, pp.1-41.)。

(3) ミランドラ『人間の尊厳について』国文社、1985年(原典:推定1486年)。

2 カバラ的宇宙における魔術師の座

魔術師はカバラを学ばねばならない。この命題について前項で説明した。既に疑問はないだろう。全く系統の違う魔術を行う者、すなわちルーン・マスター、ヴードゥーの教主、カフナズなどは別であるが、西欧の伝統、特に「黄金の夜明け」団の系列の魔術を学ぶ者にとってカバラの学習は不可欠である。

それでは、次の疑問は、「どのようなカバラを学べばよいか」であろう。

(1) カバラの分類

「黄金の夜明け」団の創始者マグレガー・マサーズは著書『ベールを剥がれたカバラ』のなかで次の分類法を紹介している。⁽⁴⁾

実践的カバラ	実践、儀式魔術、神占術、錬金術	
文字のカバラ	ゲマトリア	単語と文字の数値計算
	ノタリコン	いわゆるアナグラム
	テムラー	文字の置換
	タロー	宇宙的元型の研究
書かれざるカバラ	口承により伝えられた秘教	
教理的カバラ	カバラ的教義と文献の学習	

a 第1分類：実践的カバラ

第1分類の「実践的カバラ」は儀式魔術体系そのものであり、護符の作成、典礼儀式の手順、神占の技法等々について細かく描写されてきた。これは、本論を通じて順序良く学ぶもので、ここでは詳述しない。

b 第2分類：文字のカバラ

第2分類の「文字のカバラ」は、三つの古典的技法 גמטריא (GMTRIA ゲマトリア)、 נטריקון (NVTRIQVN ノタリコン) 及び, תמורה (ThMVRH テムラー) を集中的に学ぶ。この分野で傑出しているのは、一三世紀の碩学アブラハム・アブラフィアだ。かれはスペインのバルセロナでカバラを学習中に、この三つの文字変換を通して宇宙の神秘を解明できると信じる秘密結社と接触した。その後、カバラの学問分野として「セフィロトの径」とは別の「名の径」を造りだし、その技法を「組合せの智慧」(הצירוף חכמה) (コクマー・ハツェルフ) として体系化した。

そして、近代に集成された絵文字タローについても学ぶ。

c 第3分類：書かれざるカバラ

第3分類の「書かれざるカバラ」については、本来、ここで討議することはできない。信頼すべき結社では、十分な学習を終えた弟子たちに師匠が口伝するであろう。ただし、その進む段階については、ユダヤ教カバラの伝統では次のとおりとされた。

約3300年前にモーシェ（モーゼ）は、シナイ山で律法 (תורה トーラー。いわゆるモーゼ五書) を授かった。そのとき、かれは二つのトーラーを受けた。

(4) S.L.MacGregor Mathers, *The Kabbalah Unveiled*, London : Routledge Kegan Paul, 1981, pp.6-15.

第一は「成文トーラー」(トーラー・シェ・ピ・クタブ)であり、第二は「口伝トーラー」(トーラー・シェ・ベ・アル・ペ)である。⁽⁵⁾

しかし、この二つのトーラーは「聖書の肉体」であった。肉体を生かすための「聖書の霊魂」として、カバラがある。

霊的トーラーとしてのカバラにも二種類ある。タアマー・トーラーとシトレイ・トーラーである。

תורה טעמי (Ta'amei Torah)

旧約聖書のヘブライ文字に付属している記号の大部分は発音記号 (טעמי המקרא) タアマー・ハミクラー) である。第1、第2神殿時代のトーラーはヘブル文字と空間があるだけで、発音記号は存在しなかった。当時の神官(レビ人)階級は、手のサインで抑揚、ポーズ、母音を示した。そのサインをタアマー・ハミクラー、タアマー・ハネギナと言う。ギリシャ語では、トロープと呼んだ。しかし、離散の民となったユダヤ人は必要に迫られてマソラーを編纂し、9世紀頃にはトーラーに発音記号タアマー・ハミクラーを記載するようになる。

そこで容易に類推できるように、タアマー・トーラーとはトーラーを正しく読むことができるための秘密の知識である。それは、カバラの基本原則を意味する。古くは完全な秘伝とされていたが、16世紀にラビ・アブラハム・アズレイ(1570-1643)が一般公開を決定した。ラビ・アズレイの著作に「1540年から、カバラの基礎的な部分、タアマー・トーラーは、老いたる者にも、若き者にも等しく教えられるべきである。」とある。

『ゾーハルの書』においても、「われわれの世代においては、子どもでさえカバラと世界の内的真実を理解すべきである。」(Z III 58a)と語られている。

その趣旨を体するならば、『第1講義文書』で扱うカバラは、タアマー・トーラーである。

תורה סתרי (Sitrei Torah)

文字通りの意味では「隠されたトーラー」となる。シトレイ・トーラーとは、アブラハム・アブラフィアの注解書名であり、『ゾーハルの書』のとある章の題名でもある。しかし、本来の意味はタアマー・トーラーを超えた先に習得すべき秘儀を指す。

伝統によれば、これを学ぶ条件は、妻帯した40歳以上の男性であり、『タルムード』及び「タアマー・トーラー」の学問を修めた者とされる。

むろん、これはユダヤ教カバラを前提としており、参考にはなっても、非ユダヤ教徒の学ぶ方法は別にある。

d 第4分類：教理的カバラ

第4分類の「教理的カバラ」については、今日多くの図書が出版されており、論を待たない。「黄金の夜明け」団のマサースが、重要だと考えたのは次の4種類の書物であった。

- ① 『形成の書』及び付属テキスト
- ② 『光輝の書』及び注釈
- ③ 『セフィロトの書』
- ④ 『浄化された炎』

①～②については4項で語る。③～④の『セフィロトの書』及び『浄化された炎』は、ローゼンロスのラテン語訳『カバラ・デヌダータ』で、④は、ウェストコット版の英訳が入手可能である。カバラの主流とは言い難いが、魔術の技巧的な部分に引用されることがある。

(5) 市川裕『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版局、2004年、260-262頁。

(2) カバラの主要な要素

マサースはカバラの主要な教義として、次の十項目を上げている。⁽⁶⁾

- a 至高存在と、その性質、属性
- b 宇宙論
- c 天使と人間の創造
- d 人間と天使の運命
- e 魂の性質
- f 天使、悪魔、四大の性質
- g 明かされた法の導入
- h 数字の高等象徴
- i ヘブル文字に含まれた特異な神秘
- j 反対物の均衡

これらの項目の大多数は、あなたが学んで行くテキストに含まれており、そうでないものはより上級の教えや専門の書籍を通じて学ぶことができるであろう。

a は初期カバラの中心課題であった。『シウール・コーマー』（神的像の採寸）は、文字通り至高存在の性質と属性について語る論文である。その中には、神の四肢の一覧表、神の四肢の各部に帰属する神聖名の一覧表、そして、神の寸法の一覧表がある。この三つの一覧表は、擬人化された神のすがた、その各部に対応する発音不能な神聖名、そして途方もない宇宙的規模の神のサイズが描かれている。

b に大いなる展開を与えたのは、『イエツィラーの書』、『ゾーハルの書』、そしてルリアの「収縮～容器の破壊～修復」という神話構築である。最後のルリアについては、きわめて広範に引用されているが、ヘブル語版の講義録（アリ本人は著述活動を拒否したので、弟子ヴィタルらによる記録である。）を除くと整理された資料は少ない。

c、d の天使と人間の創造と運命についてはどうだろうか。メルカバ及びヘハロート文学に属するトラクト群、そしてゾーハル文学に類別される一連の作品のなかで大きく二分された解釈がなされている。

e と f は、『ゾーハルの書』が皓歯である。特に靈魂論については、三分論と五分論について詳細な多重靈魂論が展開されている。

g は重要な問題である。基本的にカバリストは学究の徒であると同時に実践者であった。その態度を徹底したのは、ハシディズムの運動であった。これは現代のユダヤ思想に強い影響を与えている。

h と i は本講義文書の第4、第6及び第8章で解説される数字のカバラを中核としている。アブラハム・アブラフィアや、ルリアが実用に足るシステムを開発した。

j についてはハシディズムの思想の中に語られている。

(6) Mathers, op.cit., p.15.

3 生命の木と四界

(1) 生命の木という象徴図

巨大なカバラの大系をある一つの図形に集約することができる。

その図形をヘブル語で、וֶעֶץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֵּן וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע (OTz HChI IM エツ・ハキム) つまり、「生命の木」と呼ぶ。

創世記の失楽園のくだりはご存知であろう。同2章9節に次のように書かれている。

וֶעֶץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֵּן וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע

וֶעֶץ	הַחַיִּים	בְּתוֹךְ	הַגֵּן	וְעֵץ	הַדַּעַת	טוֹב	וְרָע
ウ・エツ	ハキム	ベトフ	ハガン	ウ・エツ	ハダース	トフ	ワラ
そして木を	生命の	の中央に	園	と木を	知識	善	と悪の
VOTz	HChI IM	BThVK	HGN	VOTz	HDOTh	TVB	VRO
そして生命の木と善と悪の知識の木を園の中央に							

この二つの木のうち、知識の木の実についてはアダムが食べたことになっている。生命の木は、アダムの子孫たる人類にとって、未だ触れざる神秘である。この木の根本より、四つの大河が流れ出でる。この水源の泉を中世のキリスト教徒は、「青春の泉」(FONS JUVENTUTIS)と呼んで信仰した。

一見単純なこの図形は「比類無い人間の魂と宇宙を包括する図解」である。この図なしでは、「西洋の伝統」は根底から崩れさると言って過言ではない。

「生命の木」の配置や、各セフィラの名前を覚えるのは比較的簡単だ。しかし、セフィロトの意味が分かるにつれて、益々深く生命の木の相関が心に焼きついて行くだろう。それ故に、「カード索引システム」として「木」を利用することが可能であり、この生命の木という索引を使って、見聞きした印象、知識などを深い意識下のレベルへ収納することが出来る。しかも、必要などときには、各セフィラに集中することで必要なカードを引き出せるのである。

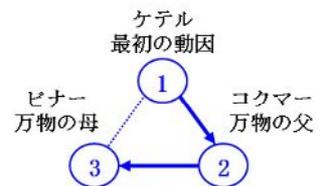
さて、「木」は10個の特殊化された球(セフィラ、複数形はセフィロト)と、その間を結ぶ22の小径(パス)から作りだされる。伝統的に、10個のセフィロトも小径と数え、「木」は32の小径で現される。セフィロトには、上から順に1、2、3…と10まで番号が付いており、名前がある。セフィロトを結ぶ小径は11に始まり32までの番号があるが、正式の名前は無い。第32の小径を「管理する知性」又は、「畏るべきタウの小径」と呼ぶように、ある種の通り名が付いていることはあるが、1から10までの小径は特別のものであり、名前、または称号を独占している。

(2) セフィロトの示す宇宙図

この図形が顕す宇宙構造について、少し詳しく説明する。

カバラの創世神話によると、宇宙の初めには「否定存在のベール」が我々の理解を越える創造の源泉を覆い隠していた。万物が顕在せざる宇宙の段階を、אֵין (AIN アイン 無)、אֵין סוֹף (AIN SVP アイン ソフ 無限)、אֵין סוֹף אוֹר (AIN SVP AVR アイン ソフ オール 無限光)の3段階に分けたが、ここでは詳述しない。その存在しないベールの中で、初めて生まれ出たのが最初のセフィラ、ケテルである。このケテルから宇宙の総てのものが造られた。ケテルとはヘブル語で王冠を意味するが、正に至尊の神の頭上に最初の小径は開いているのである。

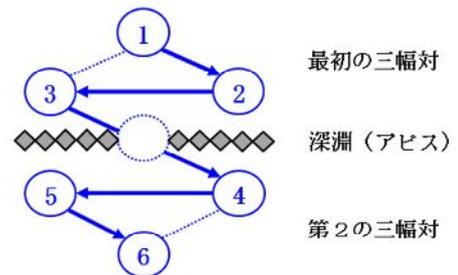
白紙を一枚用意する。何も書かれていない真っ白な紙、これが「ベール」である。その上端近くに小さな円を描く。君の前に、非存在の中から産み出されたケテルがある。源初、ケテルの外には何も無い。ケテルこそ宇宙そのものであり、以後枝葉を茂らせていく「進化する宇宙」の根であると言える。



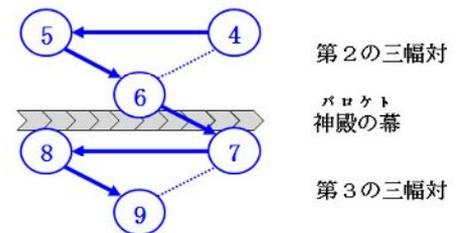
次に、最初の円の右下に第2の円を、その左、ちょうど最初の円の左下に第3の円を描く。こうして三つの円が形作る三角形が得られた。

ケテルが宇宙の「最初の動因」であるのに対し、第2のセフィラ、コクマーは男性原理の始まり、「万物の父」である。同様に、コクマーを補完する第3のセフィラ、ビナーは「万物の母」となる。従って、この最初の三幅対を一つの完結した世界と見なすこともできる。だが、流れ込むエネルギーは1→2→3→1ではなく、→4と続く。

中性の1から、男性の2、男性から女性の3が生まれたことで推測されるように、次のセフィラは男性原理の4、ケセド「統治者」である。以後、創造のエネルギーは4（男性）→5（女性）→6（中性）→と流れ続け、一瞬前までは無の中に埋もれていた容器（セフィロト）を満たしていく。それは、ちょうど階段式の水田に山頂の湖から水を引くようなものであろう。上の水田に水が満ちると、用水は溢れて下の水田を潤す。第2の三幅対4-5-6は、最初の三幅対1-2-3とは逆向きの三角形になる。その性質は最初の三幅対の鏡像（反射）と考えることもできる。二つの三角形の間の鏡を置くべき位置にあるのは深淵（アビス）と呼ばれる仕切りであり、その上にセフィロトには数えないが、架空の点ダート「知識」を想定する。

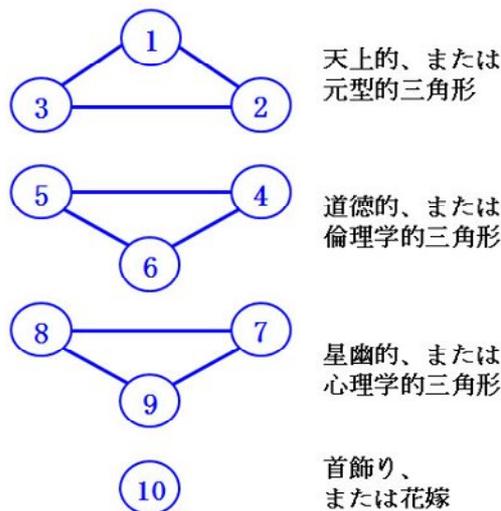


さらに、7（男性）→8（女性）→9（中性）→と流れて第三の三角形が得られる。7、8は6を中心として5、4の対照点であり、4-5-6と7-8-9の間に6-7-8という仮の三角形を考えることでこの二者はつながる。さて、再び6と7の間に三幅対を隔てる仕切りがあり、これを「神殿の幕」と呼ぶ。



ここで、三つの三角形が垂直に並ぶ図形が得られた。

ここまでの仕組みは、我々の肉体の目には映らない宇宙の上位構造である。いみじくも、ヘブル語で「基盤」と名付けられた第9のセフィラの下に我々の物質世界そのもの、地上、またはマルクト「王国」が吊り下がっている。



(3) セフィロトの名前

セフィロト（複数形 סְפִירוֹת 、単数形 סְפִירָה セフィラ）の語幹セフィル（ סִפַּר ）は、「数えること」、「数字を書く」というほどの意味である。『セフェル・イエツィラー』は、セフィロトを3部からなる神の書物（ סְפָרִים セファリム）、すなわち文字（ סֵפֶר セフェル）、数字（ סְפָר セファル）および物語（ סִפּוּר シプル）であると語る。⁽⁷⁾ 一方で後世の伝統では、上記に青玉（ סַפִּיר サフィル）を加える。⁽⁸⁾ 従って、 סְפִירוֹת （セフィラ）の語源はサファイヤ石であると強く信じられてきた。⁽⁹⁾ エゼキエルを見た「サファイヤ石のような、玉座のような・・・」（『エゼキエル書』1:26）輝きである。

各セフィロトのヘブル語の名前と意味を示す。

1	ケテル	王冠	כֵּתָר	K-Th-R
2	コクマー	知恵	חֲכָמָה	Ch-K-M-H
3	ビナー	理解	בִּינָה	B-I-N-H
4	ケセド	慈悲	חֶסֶד	Ch-S-D
5	ゲブラー	峻厳	גְּבוּרָה	G-B-V-R-H
6	ティファレット	美	תִּפְאַרֶת	Th-P-A-R-T h
7	ネツァク	勝利	נִצָּח	N-Tz-Ch
8	ホド	栄光	הוֹד	H-V-D
9	イエソド	基盤	יְסוּד	I-S-V-D
10	マルクト	王国	מַלְכוּת	M-L-K-V-T h

ここでは、現代ヘブル語の母音発音を表現する発音記号（ダーゲツシュ）は付記しない。ダーゲツシュは発音のための便法であり、我々が象徴としてヘブル語を用いるときは、不要な記号は排するからである。尚、発音はマサースらのアシュケナージ式を用いた。イスラエルにおける最近の研究書はスファルディ式にケセル、ティファレスとするものが多いことを付言しておく。⁽¹⁰⁾

(7) Aryeh Kaplan, *Sefer Yetzirah : The Book of Creation*, 1-1, Revised Edition, York Beach : Weiser Books, 1997, p.5.

(8) Rachel Elior, *Jewish Mysticism*, Oxford : Littman Library of Jewish Civilization, 2007, p.105.

(9) 旧約聖書の数カ所に出てくる「サファイヤ石」（『出エジプト記』24:10ほか）は、現在のサファイヤではなく、ラピス・ラズリだったと言われる。ラテン語訳聖書『ブルガダ』では当該記述は「サファイヤ石（*lapis sapphiri*）」と訳されている。研究者によれば「古代及び中世の後半まで、サファイヤという名前は今日ラピス・ラズリと表現される玉石を意味すると理解されてきた。」（Walter Schumann, *Gemstones of the World*, New York: Sterling Publishing Co., 2009, p.102.）とある。

(10) 離散（ディアスポラ）の民であるユダヤ人は仮寓する国により、幾つかの文化集団に分けられる。アシュケナージとは主として西欧に居住したユダヤ人の集団を指す。その語源「アシュケナズ」とはヘブル語でドイツを意味する。一方、スファルディとはイスラーム政権下でイベリア半島に住んでいたユダヤ人集団を指す。語源「スファラッド」はスペインの謂いである。ただし、キリスト教徒による再征服（リコンキスタ）後、イスラーム教徒が駆逐されたとき、ユダヤ人追放令が出され、迫害を免れるため中東に移り住んで現在に至る。このほかミズラヒ（「ミツラフ」つまり、東方）というアジア系や、最近ではロシア系などがある。第1次世界大戦後、パレスチナ地区の支配権がオスマン・トルコから英国に移行した際に、英国政府がユダヤ人居住区に、アシュケナージ系とスファルディ系の二人の首席ラビ制度を導入したことから、両者の文化的差異が強調されるようになった。

(4) 四 界

カバラにおける「四界論」(The Doctrine of Four Worlds, トーラーズ・アルバ・オラロース עולמות ארבע תורות)とは、この世界が四つの異なる世界の複合として存在するという考え方である。

トーラーズ・アルバ・オラロースのトーラーズ(複数形)とは「論説」という意味であり、アルバは「四」、オラロース(複数形)は字義的には「落ち穂拾い」であり、「世界の断片」を意味する。

一方、ヘブル語で「世界」を意味する単語は、オーラム עולמות (複数形: オーラミム עולמות) である。

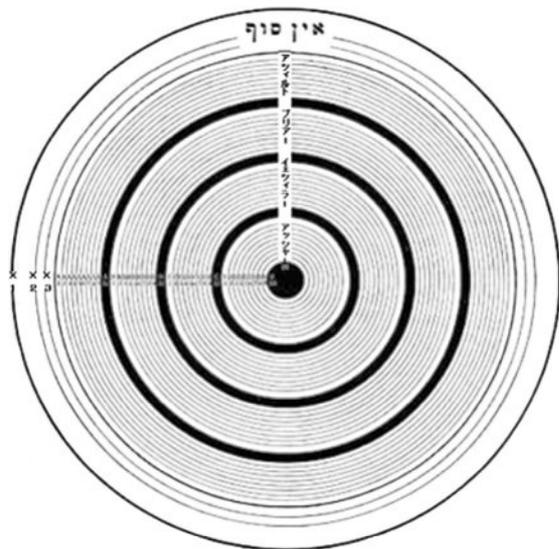
レオ・ベックは、タルムードにおける「神は世界(オーラム)の場所(マーコム)であるが、世界は神の場所ではない」を解説し、「世界」と訳されたオーラムが同時に永遠を示すものであり、一方、場所と訳されたマーコムは、存在、実在、所与などを意味するとした。⁽¹¹⁾

オーラムは、次の四つに分割されている。⁽¹²⁾

文 字	四 界	名 称	ヘブル語の名称	住 人
ヨド	神聖界	オーラム・アツィルト	עולם אצילות	神聖名
ヘー	創造界	オーラム・ハ・ブリアー	עולם הבריאה	大天使
ヴァウ	形成界	オーラム・ハ・イエツィラー	עולם היצירה	天 使
ヘー	現象界	オーラム・ハ・アッシャー	עולם העשייה	人 間

ラビ・モーゼス・コルヴェドロは先人の言葉を引く形で、次の比喩を用いた。

銀細工師が手持ちの銀の質を区分するとき。最も高純度とするのは地金として用いる混ぜもののない純銀である。次に純度が高いのは最初の純銀に少し混ぜものがある銀、第3の銀は純銀と他の地金が半々のもの、第4の銀はより多くの混ぜものを含む。⁽¹³⁾



そして、第1から第4までの各段階の純度がさらに細かく区分できるように、各界はアツィルトのアツィルト、アツィルトのブリアー、アツィルトのイエツィラー・・・アッシャーのイエツィラー、アッシャーのアッシャーと細分化される。

左図はルリア派の解釈を示すものだ。

外周の三つの円は外側からアイン (X1)、アインソフ (X2)、アインソフオール (X3)、十個の細円に分割された輪は内側へ向かって、アツィルト界 (A1~A10)、ブリアー界 (B1~B10)、イエツィラー界 (C1~C10)、アッシャー界 (D1~D10) を示し、四界を隔てる深淵が黒いギャップで示されている。最も内部の黒円はクリポトの領域である。

(11) レオ・ベック「言い表しえぬ個体」『エラノス叢書3 人間のイメージ I』平凡社、1992年、90-91頁。

(12) R. Yosef Yitzchak Schneersohn, *The Four Worlds*, New York : Kehot Publication Society, 2003, p.24.

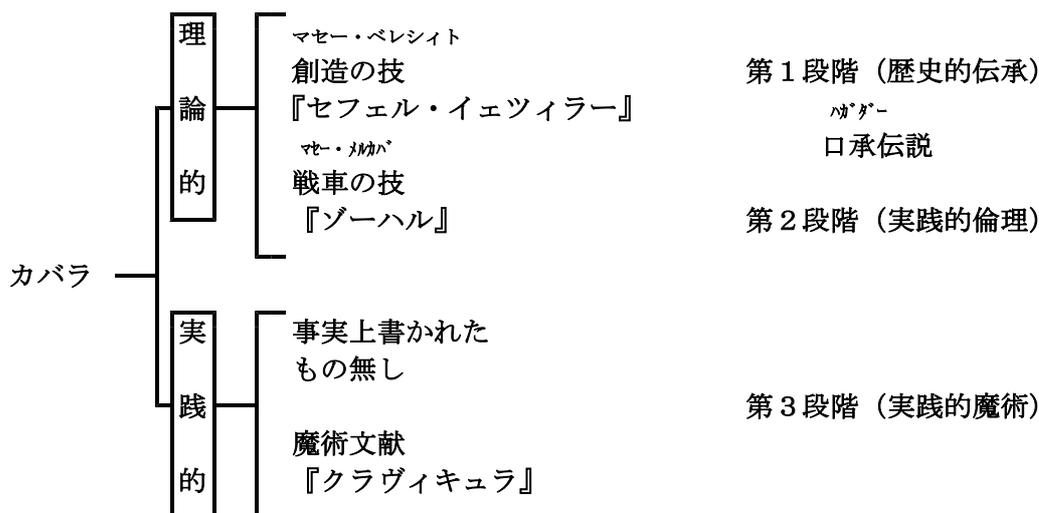
(13) Jacob Immanuel Schochet, *Mystical Concepts in Hassidism*, New York : Kehot Publication Society, 1979, p.111.

4 カバラの歴史

(1) カバラの分類

a 古典的な分類法

黄金の夜明け団が成立した19世紀末には、現代と比べるとあまり満足な原テキストが存在しなかった。カバラの分類を行うにあたり、ドイツ人研究家J・F・モリトールは、かなり単純なものを選択した。⁽¹⁴⁾



בראשית מעשה בראשית (MOSHh BRASHITH 創造の技) は、『旧約聖書』の最初の言葉、創世記1章1節に書かれたベレシイト (初めに) という単語から派生している。

『旧約聖書』の冒頭部は、天地創造の記述があるので「創造の技」と意識される。ヘブル語の聖書は、最初の単語で呼ばれるので『創世記』は「ベレシイト」である。その意味でも、「創造の」という翻訳は自然である。冒頭部 (創1-1) の全文は、以下のとおりである。

בראשית ברא אלהים את השמים ואת הארץ
ベラシイト パーテ エロヒム エツ ハヤマ ヴ'エツ ハアツ
 初めに 創造せり エロヒムは を 天 と 地
 BRASHITH BRA ALHIM ATH HSHMIM VATH HARTZ
 初めに神々は天と地を創造せり。

詳しい語句解釈は、専門書を当たって頂きたい。この「創造の技」を得意としたのは、タリナイム中期の代表的学者であるラビ・アキバ・ベン・ヨゼフであった。

一方、מעשה מרכבה (MOSHh MRKBH 戦車の技) は『エゼキエル書』第1章及び第10章に記述された四聖獣を乗せた車輪状の生き物、神の機械を指す。⁽¹⁵⁾

『エゼキエル書』そのものにはメルカバという単語は出てこないが、カバリストたちがここに見たのは神の神秘を告げる炎の戦車であった。ここからメルカバ神秘主義が派生する。

(14) Papus, *The Qabalah*, Wellingborough : the Aquarian Press, 1983, p.47.

(15) ヨセフ・ダン「ユダヤ神秘主義—歴史的概観」『ユダヤ思想 2』岩波書店、1988年、117頁。

「戦車に乗る」というのは神秘的な瞑想により異世界に飛ぶことを意味する。代表的な学者は、同じくタンナイム初期の人物ラビ・ヨハナン・ベン・ザッカイとされる。

なお、余談であるが、アブラハム・アブラフィアは先に述べた文字の組み替えを通じて、真のマセー・メルカバが達成できると確信していた。

モリトールの意見で特徴的なのは、実践的カバラの担い手は、『ソロモン王の大鍵』などを偽カバラ文献であると結論していることだ。むしろ、かの中世偽書である黒書は、カバラ魔術の体裁はとっているものの、ばらばらな資料、断片の収集に過ぎない。『アルマデール』あたりが、唯一実用的と言えるのみである。しかし、表面に出ていない文献群には、興味深い文献もあった。また、当時の魔術師の最良の部分はカバラを実践することを心掛けていた。

この事実から、身最真も含めて、口承による伝統の「実戦面での継承者」こそ魔術師だとする意見に控えめの軍配をあげたい。魔術を肯定的に捕らえる動きは、1980年代頃から米国の大学を中心に勃興してきた（ブラウン大学のマシーセン教授のゼミ『中世の魔術』等を参照のこと）。

総じてこの分類は、現代のより詳細な解釈とは異なるが、先に述べたように19世紀末の魔術世界を構築する重要なイメージを連想させる。

b 現代の学問的分類法

時代が下り、利用可能な原テキストの発掘も進んだ時代になると別の分類法が生まれる。

ヘブライ大学の碩学、故ゲルシヨム・ショーレム博士（1897-1982）は、ユダヤ神秘主義を分類して、おおむね七つに分類している。⁽¹⁶⁾

- | | |
|---|----------------|
| a | メルカバ神秘主義 |
| b | 中世ドイツのハシディズム |
| c | アブラフィアと予言者的カバラ |
| d | ゾーハルの学派 |
| e | アリの学派 |
| f | 異端サバタイ主義 |
| g | ポーランドのハシディズム |

ショーレムは、メルカバ神秘主義、ヘハロート文書群をグノーシス運動の一潮流と捕らえ、重視した。かれが事実上、カバラを学問の素材として初めて止揚することになる。しかし、神智学的カバラを重視し、恍惚のカバラ等の実践的なアプローチを軽視したため、死後、批判が集中することとなる。⁽¹⁷⁾

さて、ショーレムの分類から、主要なものについて、基本文献を中心に解説する。

(16) ショーレムの章構成に準拠した（ゲルシヨム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985年）。

(17) 上山安敏『ブーバーとショーレム』岩波書店、2009年、114-118頁。

(2) メルカバ神秘主義

a メルカバの意味

メルカバ (מרכבה) とは、ヘブル語で「戦車」を意味する言葉である。現代イスラエルの主力戦車 (MBT) もメルカバと言うが、その本来の姿は、アッシリアの太陽の戦車であり、数頭の馬に引かれる二輪馬車である。

聖書には数多くの戦車の幻視が登場する。

「20の千倍の千倍の神の戦車が、主とともにシナイから聖所に降りられた。」(『詩篇68:18』)



ここでは「神の戦車」(לכב אלהים) という表現が用いられる。

これは『エゼキエル書』にある火のなかで青銅 (ハシュマル) のように輝く四つの (四面) 生き物 (ハイオト) と同じものとされ、後世の神秘家たちはメルカバと名付けた。

メルカバ幻視 (ツェフィヤート・ハ・メルカバ) そのものには、二つの類型がある。

ひとつは、神秘家が天宮の最奥に上昇 (下降) するための乗物としてのメルカバである。無数のメルカバ群から、神秘家に対応する1台のメルカバが出現する。それは「2万2千のメルカバが神とともにシナイ、レヴィ人の幕屋に下降した。」(『エゼキエルの幻視』)⁽¹⁸⁾ とある輝く乗物である。

一方、第7宮殿に伺候するとき、戦車の玉座 (מרכבת צפית Throne-Chariot) たるメルカバに座す主に拝謁する。これは「審判及び栄光の玉座」としての「主のメルカバ」である。

このメルカバ思想 (メルカバ神秘主義) または、ヘハロート神秘主義は、紀元1世紀から5世紀にかけて成立し、後世に重大な影響力を及ぼした示唆に富む大系である。七つのヘハロートをめぐる上昇と下降の実践大系は、ほぼ同時期にイアンブリコスが大系化したテウルギアにおける霊魂の上昇 (アナゴーゲー) と下降 (カタゴーゲー) の概念と同じく、人間のもつ有限性の束縛をいかに脱して、流出の源泉 (隠れたもの、ヌース) に辿り着こうとする試みである。

ユダヤ人はこの作業を天界への「上昇」(עלייה アリヤー) と、また逆説的に「下降」(יירידה イェリダー) とも呼んだ。ショーレムは初期の研究において、メルカバ文献は古い時代には「メルカバへの上昇」という用語を使っていたが、『大ヘハロート』以降は「メルカバへの下降」になったと言及している。⁽¹⁹⁾

また、ヘラスの大系 (マギカ・ヒエラ) が、一気に源泉に上昇するのに対し、霊的階梯を設け、天使たちの承認を獲得しながら、主に近づくメルカバ神秘主義の手法は、その実践技術の確かさと幻視の鮮明さが特徴であった。

メルカバ幻視の魔術的技法の原型はペルシャや、アラブの神秘学的伝統に帰す学者もいるが、その基本は『ギリシャ・エジプト魔術パピルス』の上昇技法にある。代表的なものは「ミトラ祈祷書」(PGM IV 475-829) である。⁽²⁰⁾ カウフマンは、その差異は至高天において拝謁するのがユダヤ教の神であるか、ミトラ (Meta-tron-Mithra) であるかの違いであると言及している。⁽²¹⁾

(18) David Halperin, *The Face of the Chariot*, Tubingen : J.C.B.Mohr, 1988, pp.288f.

(19) ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985年、64頁。

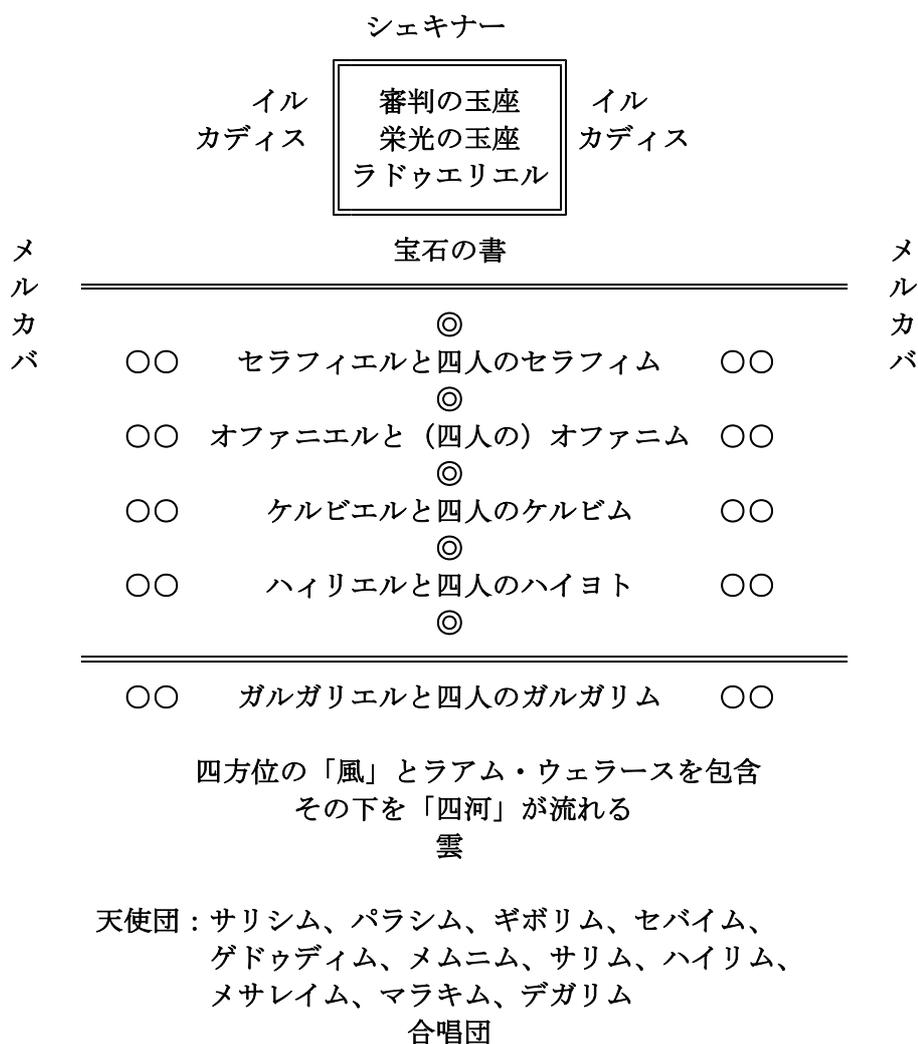
(20) 1903年にミトラ祈祷書という用語を最初に使用して、膨大なパピルス文書の一部を切り欠いたのは、デイトリッヒである (K.B.Stratton, "The Mithras Liturgy and Sepher Ha-Razim", in *Religions of late Antiquity in Practice*, Princeton : Princeton University press, 2000, pp.305f.).

(21) Kaufmann Kohler, *Jewish Encyclopedia.com-MERKABAH*, <http://www.jewishencyclopedia.com/>.

そして、実践伝承が絶えたテウルギアとは異なり、メルカバ神秘主義の初期サークルそのものは消滅したが、メルカバ幻視はハシドが継承し、カヴァノースの技法として途切れることなく現代まで生きてきた技法が伝承されている。

メルカバ幻視の体験が「肉体をもって」行われるのか、「想像の上で行われるのか」は、古代から中世まで議論の種であった。合理的な説明を採用する古文献は「預言者が肉の目（*oculis carnis*）で見たものを、心（*cordis*）の目（*oculis*）で観想すること」⁽²²⁾と解説する。しかし、古代のメルカバ幻視者は、文字通り生命がけでヘハロートに挑んだ。かれら神秘家は、生々しい現実体験として、天使に面し、紋章の力を借りて死の罨を回避して、メルカバに乗ったのである。⁽²³⁾

また、メルカバは機械ではなく、複合した天使の集合体である。オーデベルグは『第3エノク書』の解説のなかに、次のようにメルカバを図解した。⁽²⁴⁾



「1基のメルカバを構成する天使団とは、シェキナーの漂うなか最上層にある2人のイリム、2人のカドシム、その下にある書記ラドゥエリエル、メルカバ本体を護持する天使長セラフィエルと4人のセラフィム、天使長オファニエルと4人のオファニム、天使長ケルビエルと4人のケルビム、天使長ハイリエルと4人のハイヨト、そして基部の車輪を構成する天使長

(22) David Halperin, *Merkabah in Rabbinic Literature*, New Heaven : American Oriental Society, 1980, pp.174f, n.136.

(23) Elliot R. Wolfson, *Through a Speculum That Shines*, Princeton : Princeton University press, 1994, pp.121ff.

(24) Hugo Odeberg, *3 Enoch or The Hebrew Book of Enoch*, Cambridge : Cambridge University Press, 1928, pp.147ff.

ガルガリエルと8人のガルガリム、メルカバの下には聖四河があり、天使合唱団のサリシム、パラシム、ギボリム、セバイム、ゲドゥディム、メムニム、サリム、ハイリム、メサレイム、マラクィム、デガリム等がいる。」

b ショーレムの分類

ショーレムによれば、メルカバ神秘主義を支えるヘハロート文書は、次の八つに区分される。⁽²⁵⁾

- 1 『エゼキエルの幻視』(ראיות יחזקאל)
- 2 『小ヘハロート』(היכלות זוטרתיות)
- 3 『大ヘハロート』(היכלות רבתי)
- 4 『大メルカバ』(מרכבה רבה)
- 5 無題のヘハロート・トラクト群
- 6 人相術及び手相術関連文書
- 7 『セフェル・ヘハロート』(ספר היכלות)
- 8 『マセー・ヘハロート』(מעשה היכלות)



1～3については、『ユダヤ神秘主義』(法政大学出版局、1985年)の冒頭でかなり詳細に解説している。7の『セフェル・ヘハロート』は、オーデベルグが原文に詳細な研究と翻訳を付して『第3エノク書』の名前で出版した。第5のトラクト群の代表として示された『マセー・メルカバ』は、1942年にフランツ・アルトマンが刊行した。

c ヨセフ・ダンの分類

ショーレムの後継者とされるヘブライ大学のヨセフ・ダン教授(「ゲルショム・ショーレム記念カバラ教授」という称号を有する。)は、先行研究を参照しつつも、メルカバとヘハロート文学の三つのタイプとして次を示した。⁽²⁶⁾



I エゼキエルの幻視の解釈

メルカバの天への上昇の秘儀を逆説的に下降と呼んだ秘教サークルの論説である。

このタイプには、次の五巻の文書が属する。

すなわち、『小ヘハロート』、『大ヘハロート』、『マセー・メルカバ』、『シウール・コーマー』、『セフェル・ヘハロート』(第3エノク書)である。

この派の特徴は、古への「メルカバの業」の伝統と、ソロモン王の歌とされる「雅歌」を主御自身が一人称で語りかけるものと解釈することである。

(25) Gershom G. Scholem, *Jewish Gnosticism, Merkavah Mysticism, and Talmudic Tradition*, New York: The Jewish Theological Seminary of America, 1965, 2nd Improved Ed. pp. 5-7.

(26) Joseph Dan, "Three Types of Ancient Jewish Mysticism" in *Jewish Mysticism Volume 1 Late Antiquity*, Northvale: Jason Aronson., 1998, pp. 27-76.

II 文字、数字及び名前の神秘主義

その内容に創生神話的記述よりも魔術的要素を強く残すものである。

『セフェル・イエツィラー』、『セフェル・ハ・ラジム』、『ハルバ・デ・モーシェ』(モーゼの剣)、『ラビ・アキバのアレフベート』また『天使のアレフベート』などの魔術トラクトを対象とする。

III トーラーの宰相の黙示

サル・トーラー文献、サル・トーラー神秘主義という分野は、ヘハロート文学の末期に成立した。その特徴は、初期のヘハロート文献が神秘家の天界への上昇を前提としていたのに対して、天界から大天使の上位に立ち神に等しい権能を有する「トーラーの宰相」が降下し、秘密を開示する点にある。

トーラーの宰相は、大天使のうち「宰相」(prince)と呼称される高位の役職群の上席を占める者である。メタトロンがその筆頭に当たる。他の「宰相」職には、「夢幻の宰相」(Sar ha-Holam)などがある。トーラーの宰相は、翼を畳んだ長身の白く輝く法衣を纏う成人の天使として顕現する。大地と同じぐらい高齢のように見えるが、その顔は赤く輝いており、幼子のように若々しく見える。⁽²⁷⁾

また、この文献群においては「聖名」の利用等の魔術的性格が濃厚である。

d 代表的文書の内容

(a) 小ヘハロート

ヘハロート文学群のなかでも最古の作品とされるのが『小ヘハロート』(Hechalot Zutarti)である。グリュエンワルドは、成立年代を2、3世紀と推定した。⁽²⁸⁾

序文では、「もし、汝が世界のなかで選び出され、世界の秘密と智慧の秘儀が開示されるよう欲するなら、このミシュナーを死の日まで注意深く学習しなければならない。・・・」 (§ 335) と語られている。⁽²⁹⁾

この作品は、続いてラビ・アキバが第1宮から第7宮に上昇する様子、その間の幻視、開示された神の秘密について語る。

タンナイム期の高名な学者ラビ・アキバは、ローマ帝国への最後の独立戦争となったバル・コホバの乱の精神的支柱となった人物であり、聖書解釈においては、実利的、合理的な解釈よりも、神秘的な見解を多く残している。ラビ・アキバは、『雅歌』解釈に当たり、第1章4の「王は広間に連れて行った。」(B I A G I H M L K C h D R I V)の「広間」(רַחֵם)をヘハロート、つまり、「宮殿」(הַיְכָל)と解釈した。

この『小ヘハロート』は、ラビ・アキバの見解をさらに発展させている。文書中に多数列挙される天使名、神聖名は、『パピルス文書』に酷似した魔術的、テウルギア的名前である。その中には、ギリシャ語の痕跡さえ混入している。⁽³⁰⁾

神聖名の使用に関して、ラビ・アキバの名を借りて訓戒する。

(27) メタトロン伝承には、長老エノクが昇天し変容したメタトロンは、天文学的な寿命をもつ他の天使たちより若いので「若者」(Yenuka)と呼ばれる件がある。

(28) Ithamar Gruenwald, *Apocalyptic and Merkavah Mysticism*, Leiden: Brill, 1980, p.142.

(29) 訳文に付した番号()は、「古代ユダヤの文献及び研究」叢書のシェーファーらの校訂テキストによる。『ヘハロート小論』の場合は、次のとおり。Herrman, K., Renner, L., Sticker, C-R und Siebers, S. *Übersetzung der Hekhalot-Literatur III §§335-597*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1989.

(30) Gruenwald, op. cit., pp.148f.

「わが子らよ。名前を慎重に扱うべし。そは大いなる名、聖なる名、清浄なる名なり。これを用いる者は、懼れ、戦き、浄化し、聖別し、平穩たるべし。その種子は増え、万事に恙なく、かれの日は長くなるであろう。」 (§ 337)

タンナイム期の有名な神秘的説話のなかで、ラビ・アキバと3人の仲間たちの天界への上昇に関する物語がある。それは『タルムード』などの正統派ユダヤ教文献でも語られる有名な「天界参入の逸話」である。⁽³¹⁾

「四人が天界に入った。ベン・アザイと、ベン・ゾマと、アヘルと、ラビ・アキバである。一人は見て死んだ。一人は見て狂った。一人は見て若木を切った。一人は安全に上昇し、下降した。ベン・アザイは、見て死んだ。かれについて、こう書かれてある。『主の聖徒の死はそのみ前において尊い。』(『詩篇』16章15) ベン・ゾマは、見て狂った。かれについて、こう書かれてある。『蜜を得たならば、ただ足るほどにこれを食べよ。』(『箴言』25章16、聖書はこう続く『おそらくは食べ過ぎして、それを吐き出すだろう。』) エリシャは、見て若木を切った。かれについて、こう書かれてある。『あなたの口が、あなたに罪を犯させないようにせよ。』(『伝道の書』5章5)⁽³²⁾ ラビ・アキバは、無事に上昇し、下降した。かれについて、こう書かれてある。『われを引き上げ給え、われらは汝のあとを走らん。』(『雅歌』1章4)」

別の箇所では、次のように語られる。⁽³³⁾

「ラビ・アキバは彼らに語った。『輝く大理石の場所に來たら、水だ、水だと言ってはならない。何故なら、こう書かれているからだ。「嘘をつく者は、わが前に立つべからず。」(『詩篇』101章7)、と。』」

『小へハロート』では、この「水の試練」に関する神秘学的解釈を示す。

「ベン・アザイは第6宮を一瞥し、宮殿を装飾する大理石の上の空気の輝きを見た。かれの身体はその(幻視の壮観さ)に堪えきれず、口を開き、『この水は、何だ。』と訊ねて、死んだ。こう書かれてある。『主の聖徒の死はそのみ前において尊い。』ベン・ゾマは大理石を一瞥し、それを水だと思った。そして、肉体は質問を發することを堪えたが、心が堪えきれなかった。かれは気が触れた。こう書かれてある。『蜜を得たならば、ただ足るほどにこれを食べよ。おそらくは食べ過ぎして、それを吐き出すだろう。』エリシャ・ベン・アブヤーは墮落し、若木を切った。どのように若木を切ったのか?かれはシナゴークに赴き、子供たちがトーラーを学習しているのを見た。かれが(何かを)言うと、子供たちは沈黙した。こう書かれてある。『あなたの口が、あなたに罪を犯させないようにせよ。』ラビ・アキバは、無事に上昇し、下降した。かれについて、こう書かれてある。『われを引き上げ給え、われらは汝のあとを走らん。』 (§ 345)

一人は死に、一人は発狂し、一人は墮落した。無事に戻れたのはラビ・アキバだけであるという説話である。

ちなみに墮落したエリシャ・ベン・アブヤーは、アヘル(異人)とも呼ばれ、実在した

(31) Hagia 2:3-4, Tossefta, *Palestinian Talmud*.

(32) 『旧約聖書』の訳語、章番号はヘブル語定本『タナハー』による。同箇所の日本語訳(共同訳)は、5章6(キッテル版に準拠)となる。以下、通常読者が手にする日本語訳聖書と異なる場合は、同様に解釈されたい。

(33) Hagia 14b, Tossefta, *Babylonian Talmud*.

2世紀の背教者（裏切り者）である。ローマ帝国に通じたアヘルは、ユダヤ教学者の知識を悪用し、どのような禁令を出せばユダヤ人が困るかをローマの為政者に助言した。⁽³⁴⁾

ハルパーリンは、「メルカバと水」という論考の中で、第6宮殿における「水の試練」を「メルカバの暗黒面」と捕らえている。⁽³⁵⁾

この伝説に関する最も詳細な学問的論考は、モーレイ=ジョーンズの著作『透明な幻想、ヘハロート神秘主義における危険な水の幻視：原典批評及び伝承歴史考察』にあるが、詳解過ぎるため省略する。⁽³⁶⁾ 同氏は、小ヘハロートの英語全訳も提供している。⁽³⁷⁾

(b) セフェル・ヘハロート

この『宮殿の書』(Sefer Hechalot) と題されたトラクトは、1928年にオーデベルグ (Hugo Odeberg) がヘブル語校訂テキストに翻訳と註解を付し、『第3エノク書』として出版した。他の英語訳としては、アレクサンダー訳が『旧訳聖書儀典』に収録されているが、原典はなく、学問的な検討は付されていない。

この文書の語り手は、ラビ・イシュマエルである。その主な登場人物は、かつて人間の長老エノクであり、現在は天使の宰相メタトロンであり、かれを導き手として、イシュマエルは、次のような神秘体験をする。

第XVI章には、前出した背教者アヘルがラビ・アキバとともに第7宮に上昇したとき、天の軍勢を指揮するメタトロンを見て、「天には二人の権力者がいるのだろう。」と言ったため、異端者となった件を描写している。この過ちを正すために、神は天使アナフィエルを派遣し、メタトロンに火の鞭60打を加えさせる。

この『セフェル・ヘハロート』のメタトロンに対する記述は二面的である。ヨセフ・ダンは、天の最高位の宰相としてのメタトロンの伝承と、卑しい出目の人間エノクという別個の伝記をむすびつけたのは、アヘルが犯した神学的な過ち、メタトロンをデミウルゴスと同一視することを回避するためだと指摘している。⁽³⁸⁾

次の章番号は、オーデベルグによる。シェイファーの新方式の分類では、§1-80に該当する。

第I章	ラビ・イシュマエルが天界に上昇、メルカバ幻視を体験、メタトロンに会う。
第II章	最高位の天使がイシュマエルを詰問し、メタトロンが代返す。
第III章	メタトロンの70の名前、神は「若者」と呼ぶ。
第IV章	メタトロンは、大洪水のとき天界に移されたエノクであること。
第V章	エノスの偶像崇拜により、神はシェキナーを大地から移した。偶像崇拜を唆したのはアザ、ウザ、アジエルであること。
第VI章	エノクがシェキナーとともに天界に引き上げられる。天使の反論と神の答え。
第VII章	シェキナーの翼に乗り、エノクは玉座、メルカバ、守護天使たちを見る。
第VIII章	メタトロンに門が開かれる。
第IX章	エノクは至高者の祝福を受け、その身を天使の象徴で飾られる。
第X章	神は第7宮の扉のそばにメタトロンの御座を与え、伝令に次を宣言させる。メタトロンは、神の代弁者にして、王名ヤーウエをもつ8人の宰相を除く、

(34) 手島勲矢『わかるユダヤ学』日本実業出版社、2002年、105頁。

(35) David Halperin, *The Face of the Chariot*, Tubingen: J.C.Mohr, 1988, p.248.

(36) C. R. A. Morray-Jones, *A Transparent Illusion The Dangerous vision of Water in Hekhalot Mysticism : A Source-Critical & Tradition-historical Inquiry*, Leiden : Brill, 2002.

(37) C. Rowland and C. R. A. Morray-Jones, *The Mystery of God : Early Jewish Mysticism and the New Testament*, Leiden : Koninklijke Brill, 2009, pp.265-301.

(38) ヨセフ・ダン「ユダヤ神秘主義—歴史的概観」『ユダヤ思想2』岩波書店、1988年、130-131頁。

- 王国の宰相たち、天の子らの支配者である。
- 第X I 章 神はすべての秘儀と秘密をメタトロンに開示する。
- 第X II 章 神はメタトロンを栄光の外衣でくるみ、王冠を頭に戴げ、小ヤーウェと呼ぶ。
- 第X III 章 神はメタトロンの王冠に、天地を創造した炎の字体で宇宙文字を描く。
- 第X IV 章 メタトロンの戴冠を見て、すべての宰相、元素、惑星、天上の天使たちが恐れ戦く
- 第X V 章 メタトロンが火に変容する。
- 第X VI 章 アヘルが第2の神と誤解したため、メタトロンが自身の御座から統治する権能を剥奪されたこと。
- 第X VII 章 七天の宰相、太陽、月、惑星及び星座の宰相と、その配下の天使たち
- 第X VIII 章 天使の位階序列と下位天使から上位に成される忠誠
- 第X IX 章 リクビエル、メルカバの車輪の宰相、メルカバの周囲、ケドゥシャーの時の守護天使たちの騒乱
- 第X X 章 ハイェリエル、ハイヨトの宰相
- 第X X I 章 ハイヨト
- 第X X II 章 ケルビエル、ケルビムの宰相、ケルビムの記述
- 第X X III 章 「ケルビムの翼の下に」吹く風
- 第X X IV 章 聖なる一者、聖なるかな、のもつ多数のメルカバ
- 第X X V 章 オフファニエル、オフアニムの宰相、オフアニムの記述
- 第X X VI 章 セラフィエル、セラフィムの宰相、セラフィムの記述
- 第X X VII 章 ラドヴェリエル、記録書の保管者
- 第X X VIII 章 イリンとカディシム
- 第X X IX 章 天使の階級の記述
- 第X X X 章 天界の大会議に参列する72名の王国宰相たちと世界宰相
- 第X X X I 章 審判の御座の正義、慈悲及び真実（の象徴）
- 第X X X II 章 不正なる者への審判の執行、神の剣
- 第X X X III 章 審判の御座の慈悲、平安、破壊の天使たち、書記。
栄光の御座の天使たちと、その下を流れる炎の河
- 第X X X IV 章 ハイヨトの周りの火と水と霰などの河でせきた円、
ケドゥシャーの応唱
- 第X X X V 章 アラヴォート・ラキアにある天使の陣屋：ケドゥシャーを演じる天使
- 第X X X VI 章 聖歌詠唱の前に天使は火の河に沐浴する。
- 第X X X VII 章 シェキナーの四つの陣屋とその周辺
- 第X X X VIII 章 「聖なるかな」を詠ずるときに全天、とりわけ天体を襲う恐れ。
そは世界の宰相の手で鎮められる。
- 第X X X IX 章 ケドゥシャーのとき、御座から明晰なる名前が飛翔し、
数多の守護天使たちは、その前にひれ伏す。
- 第X L 章 正しい順序で「聖なるかな」を唱える司牧天使は王冠で報いられ、
さもなくば焼き尽くす火で罰される。新たな天使が創造され、
滅ぼされた天使の代役を務める。
- 第X L I 章 メタトロンはイシュマエルに栄光の玉座に刻まれた文字、
それにより天地のすべてが創造された文字を見せる。
- 第X L II 章 幾つかの神聖名と他の同様の驚異が対極なるものの均衡を保つ。
- 第X L III 章 メタトロンはイシュマエルに未生の霊と義なる死者の霊の寓居を見せる。
- 第X L IV 章 メタトロンはイシュマエルに悪しき霊とシェオルの中間領域に住む霊の
寓居を見せる。族長はイスラエルの救済を祈る。
- 第X L V 章 メタトロンはイシュマエルに御座の帳に記された
過去と未来の出来事を見せる。
- 第X L VI 章 イシュマエルが見せられた星々の場所
- 第X L VII 章 メタトロンはイシュマエルに懲罰を受けた天使の霊を見せる。

第X LVIII(A)章 メタトロンはイシュマエルに至高者の右手を見せる。
その右手は背後に隠され秘められているが、
将来イスラエルの救済のため働くことを運命づけられている。

第X LVIII(B)章 戴冠し、無数の守護天使を従えて、御座から進発する神聖名は、
天界を巡回し、御座に戻る。
天使たちは「聖なるかな」、「祝福されし」を唱える。

第X LVIII(C)章 エノクメタトロン断片

第X LVIII(D)章 メタトロンの名前。シナイ山でモーシェに開示された智慧の宝玉。
モーシェへの秘密開示に反抗し、神の答えと叱責を得た天使たち。
疫病を癒す秘儀の伝統の連鎖と伝授の権能。

(c) 大へハロート

最も著名なへハロート文献が『大へハロート』(Hechalot Rabati)である。
この著作の語り手はラビ・イシュマエルであり、天の宮殿を上昇する過程を一つ一つ描写している。そのためメルカバ神秘主義を実践する者の手引書となっている。
記述内容は、きわめて魔術的である。
神秘家は自らの光体(古代においては生身でと同義語である。『大へハロート』では、第1段階が幻視の参加、第2段階が肉体でのメルカバ体験である。⁽³⁹⁾)を分離し、諸宮殿を通過、第6宮殿における門番の試練を克服し、メルカバに乗り、第7宮殿に下降する。
武装天使たる門番たちは、4名組の右翼と左翼の計8名が各宮殿の扉の横梁の上に待ちかまえている。

「ラビ・イシュマエルは言った。これらはラビ・ネフニヤ・ベン・ハカナが語りしこと。
七つの宮殿に、トゥトルシアー(טוטרסיא)」、主、イスラエルの神は座したり。
宮殿の奥には次の宮殿がある。各宮殿の扉には、8人の門番がおり、4人は扉上の横木の右に、4人は左にいる。・・・ (§206)
これらは第1宮殿の扉の門番の名前なり。
ダハビエル、カシュリエル、ガフリエル、プティエル、トフヒエル、ダハリエル、マスキエル、シャヴィエル、またはシヴィエル (§207)
これらは第2宮殿の扉の門番の名前なり。・・・ (§208)」
そして、第1から第5宮殿の扉の門番をなだめ、扉を通過できる方法を指示する。
「ラビ・イシュマエルは言った。汝が第1宮殿に至り、扉の前に立つとき、二つの紋章を手にとるべし。ひとつはトゥトルシアー、主、ひとつはスリヤー、顕現の宰相なり。
トゥトルシアーの紋章を右側の門番に、スリヤーの紋章を左側の門番に見せよ。
ダハビエル、第1宮殿の扉の門番の長にして、第1宮殿の監督者と、トフヒエル、左の横木に立つ者が即座に汝をつかむ。かれらは汝を、タグリエル、第2宮殿の扉の門番の長、横木の右に立つ者と、マトピエル、横木の左に立つ者に引き渡す。 (§219)
かれらに二つの紋章を見せよ。ひとつはアドリフロン、主、ひとつはオハジャー、顕現の宰相なり。・・・ (§220)」

しかし、第6宮殿では別のやり方を試す必要がある。この宮はメルカバへ下降する資格を有しない者を火で排除する場所だからだ。ここでは三つの紋章を用いる。

第6宮殿の右翼の門番の天使長カツピエルはメルカバに下降するに相応しくない者を殺戮するため剣を履き、弓を携えている。ユダヤ教の審判の天使は、靈魂を切り刻み2度と

(39) Annelies Kuyt, *The 'Descent' to the Chariot*, Tübingen : J.C.B.Mohr, 1995, p.123.

再生しないようにギザギザの歯のついた剣を抜き控える。その刀身からは冷たい炎が吹き出し、刃の上を露が滴る。

へハロート文書では、神秘家は各宮殿の門番の天使長に、安全な通過を保障する神聖名の刻印された「印章」(סגולות) または、「指輪」(טבעות) を示す。⁽⁴⁰⁾ ここでは「印章」と和訳したが、「自己の封印」における「封印」(hotam) と同じ文字である。

古典古代においては、金属の護符、召喚壺などによく「印章」(σφραγίς)が刻印された。一般的には、金属、玉石、羊皮紙に刻印(彩色)される。

第6宮殿の門番に対して、右翼の天使長カツピエルにザルリヤルの印章2個を示し、左翼の天使長ドゥミエルにはボロニヤの印章を示すことになる。同書には印章の形状に関する記録はない。ユダヤ魔術の伝統的なデザインは「カイロ・ゲニザ草稿、JSTL ENA 1177.16」などに尙うことができる。⁽⁴¹⁾ 同時期に詳細な技法を蓄積したグノーシス主義者の幾何学的印章の図例は、クルト・ルドルフを参照されたい。⁽⁴²⁾

この第6宮殿でメルカバに乗り(明確には書かれていない)、下降または上昇して第七宮殿に到達し、栄光の玉座としてのメルカバに対面する神秘体験が続く。

なお、神秘家がメルカバに対峙するとき、幾万ものメルカバのなかから、かれに対応するメルカバを目の当たりにすることになる。

第I章 (§ 81-93)	ゲドゥラー編
第II章 (§ 94-106)	ケドゥシャー
第III章 (§ 107-121)	十人の殉教者の物語
第IV章 (§ 122-126)	ダビデの黙示録
第V章 (§ 130-139)	ラビ・イシュマエルのアガダート
第VI章 (§ 140-145)	メシアのアガダー
第VII章 (§ 152-169)	ケドゥシャー
第VIII章 (§ 170-190)	天上と地上の報償
第IX章 (§ 198-267)	ハヴラー報告
第X章 (§ 268-276)	神の報償
第XI章 (§ 281-306)	サル・ハ・トーラー編
第XII章 (§ 307-314)	ペレク、ラビ・ネフニヤ・ベン・ハカナ
第XIII章 (§ 318-321)	ホタル・ガドク/ケテル・ノラ編
第XIV章 (§ 322-334)	祈 禱

(d) マセー・メルカバ

ある意味で最も秘密にされてきたへハロート文書が、この『マセー・メルカバ』である。同書は、中世期にヴォルムスのエレアザルが部分的に引用し、有名になったメルカバ幻視の奥義書であり、理論的背景を殆ど説明せずに、天界に上昇する方法論だけを述べるというへハロート文書に特有の記述法で記されている。

それも無理のない話である。2～8世紀頃に成立したと推定される同書は、元来が口伝口承により保持されたもので、後世のハシドが文書に残そうと考えなければ消滅した虞が

(40) 一例を示すと『小へハロート』では「指輪」が用いられ、『大へハロート』では「紋章」が用いられる。

(41) Peter Schafer und Shaul Shaked, *Magische Texte aus der Kairoer Geniza Band II*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1997, p.399.

(42) クルト・ルドルフ『グノーシス』岩波書店、2001年、188頁。

ある。従って、理論的な細部は、別な暗喩の形で示された可能性が高い。

ショーレムは、1960年にアルトマンが典拠とした写本（ドイツのハシディムが保存していた14世紀の写本）を利用し、ヘブル語原文を公開した。

その後、シェファー、シュワルツらの献身的な作業により90年代までには原文及びドイツ語、英語訳で参照することができるようになった。

ショーレムは二種類の写本しか利用できなかったが、後に現存する五種類の主要な写本と四種類の副次的な写本を用いて考証を行ったシュワルツによれば、『マセー・メルカバ』の構成は、四部に分かれる。⁽⁴³⁾

何故、ここで『マセー・メルカバ』を強調するかと言うと、元来、実践に重きを置いたヘハロート文書のなかでも、奥義と目された領域に関する詳細な指南書であるからだ。神秘哲学の実践を標榜するI・O・Sにおいては、必読の一書と言えるかもしれない。

これらの文書が成立した時代には、『魔術パピルス文書』を初めとし、さまざまな混交文献が氾濫していた。もともと、ヘラス、ユダヤ双方よりも古く存在し、常に宗教問題の調停者として知られた古代エジプトの魔術的伝承（「マートの広間の秘伝」）には、天界の変遷及び門番との質疑応答という先駆的概念があった。『魔術パピルス文書』の一部では、それを卑俗な形で歪曲していた。

しかし、『大・小ヘハロート』では、ユダヤの宇宙論に従いエジプトの魔術的神話構造を翻訳し、「ヘカル」という新しい概念に結晶化させ、『マセー・メルカバ』では、より具象化しやすい近代的システムに再構築したと捕らえることができる。

ただし、先述したように、『マセー・メルカバ』は、東欧・西欧のハシディムの秘伝として継承されたため、上昇、自身の封印、天使との邂逅等を記述した原文書（Urtext）そのものであり、釈義、注解に該当する部分がない。

理論面については、使用するわれわれが補いつつ、正しい解釈を加えていく必要がある。ここに校正済みの写本から「七つの封印」⁽⁴⁴⁾と「三つの名前（言葉）」⁽⁴⁵⁾を紹介する。

「ラビ・イシュマエルは語りき。

אֲפֶרֶט、顕現の天使（Angel of the Presence）曰く。

この秘儀を用いるものは、全霊を以て祈るべし。片言隻句も忘るるなかれ。
（さもなくば）四肢は打ち砕かれん。

次なる「三つの名前」を唱えよ。されば、われ降臨せん。

S D I R T h I N R I A I I B I A B I H V S V V T z D V P
R V P D C h M) (§ 563)

「ラビ・イシュマエルは語りき。

かつて、ラビ・ネフニヤ・ベン・ハ・カナーに尋ねたり。

トーラーの宰相（S h R H T h V R H）の智慧はいかにして得られん。

かれは答えり。

(43) Michael D. Swartz, *Mystical Prayer in Ancient Judaism*, Tübingen: J.C.Mohr, 1992, pp.7ff.

(44) 七つの封印（Z' C h V T h M V T h）、封印（C h V T h M）とは、羊皮紙に刻印された封印、あるいは古代においては封印の指輪として用いられた。「サル・トーラ法」では、テウルギア的神聖名を用いて身体の上に封印を置くことで、神聖の顕現から自らの霊体を保護するものである。その詳細は、第9章で示す。

(45) 三つの名前（G' S h M V T h）と三つの言葉（G' A V T h I V T h）、名前（S h M）と言葉（A V T h）は、テウルギア的神聖名である。名前は直接的に神聖名を意味するが、言葉は兆しという意味ももつ。

ヘブル語において「記号」や「文字」を意味するA V T h（オート）は、複数形になると2種類の変化をする。複数形として用いられるのは、A V T h V T h（オートオート）又はA V T h I V T h（オーティオート）であり、前者は「一般的な文字のしるし」であり、後者は「奇跡のしるしとしての神のしるし」を意味する（拙稿『力の名前』（I・O・S・サイトに掲載）を参照）

汝、栄光の天使の発する「三つの名前」を力もて唱えるべし。

Z T z T I T z Z R Z I A L T h I T h T h V P I L T I R B T h
I P A A R C h R Z I O A O I Z V Z

祈るときは、(祈りの) 最後にく三つの言葉>を発音すべし。

そは被造物が ARK S I V I、イスラエルの神を仰ぎ見るときに発するものなり。

G L I A I I A R D R I H A L Z K B B I B A

また、汝が他の祈り手を前にするときは、

メルカバの車輪 (G L G L I H M R K B H) が、栄光の玉座の前で歌を献じるとき
発音せる「三つの言葉」を発音すべし。

H T z P Z I P A H P I A V G H V A S h B I B A

こは智慧の獲得なり。この言葉を発音せるものは誰でも永遠の智慧に預かる。

しかし、万人がこれに耐えられるのか？

モーシェはヨシュアに三つの言葉を書き送り、かれはそれを飲み下した。

もし、汝がそれに耐えること能わずば、<英雄>の単語を印章として刻印し、
煩わされることなかれ。

Z P Q Q N I D R H V V V A H B A S h B V N Q N T B V H T z
H R I T H R D V H D R H V Z H S h B V N

そして、畏怖すべき父、AZ Q M P A V P V P I I D D R A V R N V Dを
忘れるなかれ。智慧の強化と理解の栄光のために。」 (§ 564)

「ラビ・イシュマエルは語りき。

顕現の天使 P R Q R S が降臨する際、われは七つの封印をもち我が身を封じる。

聖なるかな汝、I I。智慧と洞察をもて、天と地を造りし者よ。汝が名は永遠なり。

C h I A V P S I S I P I I A V L V S M B I K I I T h N I I

そは汝が下僕の名前なり。

(七つの封印により、ラビ・イシュマエルは心臓を封じる。

注：本行は『原稿M22』のみ)

A V R I S S S T h I I わが脚に。

A B G B G G わが心臓に。

A R I M T h I P A わが右腕に。

A V R I S T h S I I A H わが左腕に。

A B I T h T h L B G A R I I V D I V A L わが首に。

A V P A K Q I T R S S A C h D I D I D I H

わが生命とすべての部分を守護するために。

A V P P T h I H V C h I V I V Z H V I H V T h I T h S

わが頭上に。

R I R G V G 大いなるもの。HP I P HP 清浄なるもの。

H H I I V H H I H H H H 久遠の詠唱よ。

智慧の主を讃えよ。すべての権能は汝にあり。

聖なるかな汝、I I。無敵にして、至高、至上、大いなる支配者よ。」 (§ 566)

第 I 部 (Section I)

第 I 章 (§ 544-551) ラビ・アキバの「上昇」に関するラビ・アキバと
ラビ・イシュマエルの対話

第 II 章 (§ 552-553) 二つの祈り

第 III 章 (§ 554-555) 七つのへハロート及びびその天使たちの描写

第 IV 章 (§ 556) ラビ・ネフニヤの短い教訓

第 V 章 (§ 557) ラビ・アキバの教訓

第 VI 章 (§ 558-559) 橋とへハロートの描写

第II部 (Section II)

- 第七章 (§ 560-562) ラビ・イシュマエルがラビ・ネフニヤから学習した「サル・ハ・トーラー (律法の宰相)」実践の説明
- 第八章 (§ 563-564) 「三つの名前」に関する二種類の指導
- 第九章 (§ 565-568) ラビ・イシュマエルと顕現の天使の対話
- 第十章 (§ 569-570) 「サル・トーラー」の実践に関するラビ・ネフニヤからラビ・イシュマエルへの補足的教示

第III部 (Section III)

- 第XI章 (§ 579-582) ラビ・イシュマエルは智慧の天使の名前を学ぶ
- 第XII章 (§ 583-585) ラビ・イシュマエルと顕現の天使の邂逅
- 第XIII章 (§ 586-591) ラビ・ネフニヤからラビ・イシュマエルに伝えられた「五つの祈禱」

第IV部 (Section IV)

- 第XIV章 (§ 592-596) ラビ・アキバとラビ・イシュマエルの対話
他の祈禱文及び天界の説明を含む。

e 文献紹介

メルカバ神秘主義を専門に扱った邦語の書籍はまだない。しかし、総論的なユダヤ神秘主義の解説の一部として書かれたものがある。

- ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985年
- ヨセフ・ダン「ユダヤ神秘主義 一歴史的概観」『ユダヤ思想 2』岩波書店、1988年

外国の研究書については、次の著作が参考になる。

おおむね1980年を境界に、メルカバ神秘主義の研究が頻出するようになる。それ以前の学術的研究は、フーゴー・オーデベルグの『第3エノク書 または ヘブル語エノク書』(1928年)、ハインリッヒ・グレーツの『グノーシス主義とユダヤ思想』(1846年)そしてゲルショム・ショーレムの『ユダヤ的グノーシス、メルカバ神秘主義及びタルムード期の伝統』(1965年)の3冊だけだった。

オーデベルグの研究した『第3エノク書』は、現代の研究者には『セフェル・ヘハロート』と呼ばれている。グレーツはメルカバ神秘主義とグノーシス主義の類縁性について研究した。

ショーレムの著作は、この分野の研究の草分け的作品である。それ故に、後代の研究によりグノーシス思想との関連仮説に疑問が提示されている。しかし、全般的な価値は落ちていない。

ブリューメンサルは『セフェル・イェツィラー』と『プルケイ・ヘハロート』の部分訳を掲載している。グリュエンワルドは、この分野における包括的な研究を行った。

ハルパーリンの大部の著作は、メルカバをさまざまな角度から分析したこの分野の金字塔である。シュバルツは『マセー・メルカバ』を徹底的に検証した。

- オーデベルグ『第3エノク書』
Odeberg, Hugo. *3 Enoch or The Hebrew Book of Enoch*. London: Cambridge University Press, 1928.
3rd Enoch or the Hebrew Book of Enoch. New York : Ktav Publishing House, 1973.

- ショーレム『ユダヤ的グノーシス、メルカバ神秘主義及びタルムード期の伝統』
Scholem, Gershom G. *Jewish Gnosticism, Merkabah Mysticism, and Talmudic Tradition*.
New York : The Jewish Theological Seminary of America, 1965. 2nd Improved Ed.
- ブリュームエンサル『ユダヤ神秘主義の解題』上巻
Blumenthal, David R. *Understanding Jewish Mysticism a source reader - The Merkabah Tradition and The Zoharic Tradition -*. New York : Ktav Publishing House, 1978.
- グリュエンワルド『黙示録的、メルカバ神秘主義』
Gruenwald, Ithamar. *Apocalyptic and Merkabah Mysticism*. Leiden : E. J. Brill, 1980.
- グリュエンワルド『黙示主義からグノーシス主義へ』
Gruenwald, Ithamar. *From Apocalypticism to Gnosticism*. Frankfurt : Verlag Peter Lang, 1988.
- ハルパーリン『ラビ文学におけるメルカバ』
Halperin, David J. *The Merkabah in Rabbinic Literature*. New Heaven: American Oriental Society, 1980. American Oriental Series Vol.62.
- ハルパーリン『戦車の貌』
Halperin, David J. *The Faces of the Chariot - Early Jewish Responses to Ezekiel's Vision*.
Tübingen : J.C.B.Mohr, 1988. Text und Studien zum Antiken Judentum 16.
- シュバルツ『古代ユダヤの神秘的祈祷』
Swartz, M.D. *Mystical Prayer in Ancient Judaism*. Tübingen : J.C.B.Mohr, 1992.
Text und Studien zum Antiken Judentum 28.
- チャールズワース編『旧約聖書儀典』第1巻、第2巻
Edited by J. H. Charlesworth. *The Old Testament Pseudepigrapha Vol.1, Vol.2*.
New York : Doubleday, 1983, 1985.

ヘブライ大学ユダヤ学部長、ゲルシヨム・ショーレム・カバラ教授のヨセフ・ダンの論文集の第1巻である。いわば最新の研究成果とも言える。ダン本書の「ユダヤ的グノーシス主義」(1995年『J S Q』初出)でショーレム等の先行研究におけるグノーシス主義の取扱に疑義を呈している。他の論文も参照に価する。

- ダン『ユダヤ神秘主義』第1巻 ー中世後期ー
Dan, Joseph. *Jewish Mysticism Volume 1 Late Antiquity*. Northvale: Jason Aronson, 1998.

ドイツのJ. C. モール社からピーター・シェイファー監修の下に出版された「古代ユダヤ文献及び研究」シリーズは、この分野の基本文献を多数輩出している。

以下に示すのは、膨大なヘハロート文書群を整理し、統一行番号を伏して出版された校訂テキスト、翻訳、研究書等である。特に『ヘハロート文書：訳本』全4巻には、ゲニザ断章を含む利用可能な全てのヘハロート文書の翻訳(ドイツ語訳)が掲載されている。

なお、シェイファーらの用いるヘブル語のドイツ語等価表現は、現在、I ∴ O ∴ S ∴の講義文書で使用しているものとは大きく異なる。

たとえば、氣息音である **ט** を「'」で表現するなど、ある意味より正確な注記法である。従って、天使 **טוטרקיאל** は「TWTRKY'L」(**ט**の傍点は下)と表現される。もし、

この方式での読み方に自信がなければ、『へハロート文書：大要』、『へハロート文書：ゲニザ断章』と『シウール・コーマー：校訂テキスト』にはヘブル語、アラム語原文が掲載されているので参照されたい。

- シェイファー『へハロート文書：大要』
Schäfer, Peter. *Synopse zur Hekhalot-Literatur*. Tübingen : J.C.B.Mohr, 1981.
Text und Studien zum Antiken Judentum 2.
- シェイファー『へハロート研究』
Schäfer, Peter. *Hekhalot-Studien*. Tübingen : J.C.B.Mohr, 1988.
Text und Studien zum Antiken Judentum 19.
- シェイファー&ヘルマン『へハロート文書：訳本』第1巻 §§1-80
Schäfer, P. und Herrman, K. *Übersetzung der Hekhalot-Literatur*, I §§1-80.
Tübingen : J.C.B.Mohr, 1995. Text und Studien zum Antiken Judentum 46.
第1巻は、『セフェル・へハロート』を扱う。
- ベッカーほか『へハロート文書：訳本』第2巻 §§81-334
Becker, H-J., Herrman, K., Sticker, C-R. und Siebers, S.
Übersetzung der Hekhalot-Literatur, II §§81-334.
Tübingen : J.C.B.Mohr, 1987. Text und Studien zum Antiken Judentum 17.
第2巻は、『大へハロート』を扱う。
- ヘルマンほか『へハロート文書：訳本』第3巻 §§335-597
Herrman, K., Renner, L., Sticker, C-R und Siebers, S.
Übersetzung der Hekhalot-Literatur, III §§335-597.
Tübingen : J.C.B.Mohr, 1989. Text und Studien zum Antiken Judentum 22.
第3巻は、『小へハロート』及び『マセー・メルカバ』等を扱う。
- ヘルマンほか『へハロート文書：訳本』第4巻 §§597-985
Herrman, K., Renner, L., Sticker, C-R und Siebers, S.
Übersetzung der Hekhalot-Literatur, IV §§597-985.
Tübingen : J.C.B.Mohr, 1991. Text und Studien zum Antiken Judentum 29.
第4巻は、『大メルカバ』ほかを扱う。
- シェイファー『へハロート文書：ゲニザ断章』
Schäfer, P. *Geniza-Fragmente zur Hekhalot-Literatur*.
Tübingen: J.C.B.Mohr, 1984. Text und Studien zum Antiken Judentum 6.
- コーヘン『シウール・コーマー：校訂テキスト』
Cohen, M.S. *The Shi'ur Qomah: Texts and Recensions*.
Tübingen: J.C.B.Mohr, 1985. Text und Studien zum Antiken Judentum 9.

(3) イェツィラーの書

a セフェル・イェツィラーの構成

マサースが4つの基本文献の筆頭にあげたものが『形成の書』である。

メルカバ及びヘカロート文献群の多くが歴史の中に忘れさられたのに対して、最初に普遍的価値を認められたカバラ文献は、この『形成の書』(הַצִּיּוּר סֵפֶר סֵפֶר סֵפֶר סֵפֶר セフェル・イェツィラー)である。この書物の原型となった草稿は、3世紀頃に成立したと推測される。⁽⁴⁶⁾

しかし、ある秘教学派の説によれば、モーゼの時代の聖書の記述を元にしており、モーゼ自身が主から拝領した律法の一部であると主張する者もいる。

グリュエーンワルド (Ithamar Gruenwald) によれば、『形成の書』には3種類の版がある。「短文版」、「長文版」及び「サアドヤー注釈版」(Saadian recension、10世紀初頭のサアドヤーの注釈を基底とした版)である。しかし、長文版でも2千5百語しかない。

一般に流布している版は全6章構成である。第1章において、カバラ関連文献のなかに初めてセフィロトの概念が紹介され、創造の形而上学的段階について記述される。残りの5章において、ヘブル語の22文字の象徴が解題される。3母音、アレフ、メモ、シンは3元素(風、水、火)に対応し、7複字は惑星(原始の五惑星と太陽、月)に、12単字は獣帯(黄道12宮)のサインに対応する。

『セフェル・イェツィラー』の文字の記述を読む際は、本講義文書の第1章5項「ヘブル語について」を読み返しながらか、意味を確認してもらいたい。弱ダゲツシュの意味などを思い出せば、別の読み方ができるであろう。⁽⁴⁷⁾

b 文献紹介

『セフェル・イェツィラー』の日本語訳は、次の3冊の書籍に収録されている。

残念ながらヘブル語の底本が明確でないため、学問的に正確な著作とは言えない。

また、ドーリル版は、訳者がカバラ思想を理解していないため、些か難しい訳文になっている(訳者本人からの聞き取り。)

- M. ドーリル (林 鐵造 訳) 『カバラの真義』霞ヶ関書房、1978年
- M. P. ホール (大沼 忠弘 訳) 『カバラと薔薇十字団』人文書院、1981年
- 箱崎絵一 『カバラ ユダヤ神秘思想の系譜』青土社、1986年

従って、ヘブル語原典を踏まえて、正確な訳文で学習する必要がある。

英語訳で参照できるものは、次のとおり。

最初の英語訳は、カリッシュ博士が1877年に刊行している。しかも、ヘブル語と英語の丹念な対訳本として現在でも入手可能である。底本は、ヘブル語長文版を使用している。

- イサドル・カリッシュ 『セフェル・イェツィラー 創造の書、または古代ユダヤ哲学』
Kalisch, Isadore. *Sepher Yezirah. A Book on Creation; or the Jewish Metaphysics of Remote Antiquity* New York: L.H. Frank & Co., 1877.
Reprinted 1948, AMORC, San Jose

(46) Joseph Dan, "Three Phases of the History of the Sefer Yezira" in *Jewish Mysticism Late Antiquity*, Northvale: Jason Aronson, 1998, p.155.

(47) S.Morag, "The Seven Double Letters BGD KPRT," in *Studies in Honor of N.H.Turusinai*, Jersalem: 1960, pp.207-242.

G・Dの創設者ウエストコット訳も有名である。比較的最近出版された第4版（ダーシー・クーンツ編「黄金の夜明けシリーズ」第3巻）には、ヘブル語テキスト添付とあるが、内容は前出のカリッシュ版の引用である。

残念ながらウエストコットも使用したヘブル語底本が疑わしい。ラテン語版を主に使用して翻訳したようだ。A. E. ウェイトは、リッタンゲリウスのラテン語訳本を基に、他のラテン語版と比較して訳したものと非難している。

なお、ウエストコットはラテン語訳の『智慧の32の小径』を英訳し『形成の書』に追録した。以後、この作者不明の小品が魔術の世界に意外な影響を及ぼす。

- ウィリアム・ウィン・ウエストコット『セフェル・イエツィラー 形成の書 及び智慧の32の小径』
Westcott, William Wynn. *Sepher Yetzirah. The Book of Formation and the Thirty-Two paths of Wisdom, translated from the Hebrew.* Bath : Fryar, 1877.
“Fourth Revised edition, with Hebrew text” Volume 3 of Darcy Kuntz’ Golden Dawn Studies Series (Edmonds: Holmes Publishing Group, 1996.).

最近、出版された学問的研究を紹介する。

- ピーター・ハイマン『セフェル・イエズィラ 翻訳、原文、批評、注解』
Hayman, A. Peter. *Sepher Yesira. Edition, Translation and Text-Critical Commentary.* Tubingen : Mohr Siebeck, 2004.

書籍を買うのは間尺に合わない。どうしてもオンラインで（無料で）見たいという人のために、掲載サイトを紹介します。

- セフェル・イエツィラー本文テキスト
www.vermontel.com/~vtsophia/SEPPER.htm
- コペンハーゲン・カバラ、霊的テクノロジー実験室
<http://qabalah.mortenhass.com>
- W o C（戦車の業）版セフェル・イエツィラー
www.workofthechariot.com
- アレイ・カプラン訳短文版S Y
www.webcom.com/hermit/page/sefer.htm
- 短文版及び解説
www.opus1.com/~emol/para/seferyetzirah/sfindex.html
- グリューエンワルド版校訂済み1章
www.courses.rochester.edu/goldberg/Fall1999/REL231
- サアディヤー註解版
www.wbenjamin.org/saadia.html

(4) バーヒルの書

a 書物の構成

『光明の書』(Sefer Bahir)は12世紀(1180年)の傑出した神秘学の著作だが、その草稿の成立年代は6世紀とされ、セフィロトの概念が明確に記述されている。

この書物は匿名作者によって12世紀頃に書かれた。直接に言及されていないが、先行するメルカバ及びヘハロート文献群と『形成の書』の強い影響を受けており、セフィロトの概念を拡大し、神の全体世界を成り立たせる十種類の神の属性として捕えている。⁽⁴⁸⁾ 今日、我々が用いる意味でのセフィロト観は、この『光明の書』を契機に成立したものである。

「バーヒル」とは「輝き」という意味である。旧約聖書のヨブ記37:21の「光が空に輝いて(וְהָיָה)いると」が書名の所以であるが、この書物より後に書かれた『ゾーハルの書』も、「光輝」(וְהָיָה)を題材としており、後世の『シャーリー・ケドゥーシャー』などでは、光の階級を、トヴ(良光)、ノガー(閃光)、カヴオド(栄光)、バーヒル(輝き)、ゾーハル(光輝)、カィーム(生命)の六つに分類している。バーヒルはゾーハルに並ぶ輝きである。それでは、『光明の書』の特徴を捕えてみよう。

同書の最大の特徴は、セフィロトを神性の流出として捕え、神のアスペクトを説いたことである。しかも、それを天界の三つ組み(ケテル、コクマー、ビナー)とそれ以下の七つに分割して捕えている。これは、後のセフィロト論の根拠となるもので、天界の三つ組みを「三つの御言葉」、七セフィロトを「七つの御声」として表現している。

この「七つの御声」(詩篇29)は、現在流布しているセフィロトとは配列が異なる。

- 1 「主の御声は水の上であり、栄光の神は雷を轟かせる」(詩篇29:3)
「水」はケセドを象徴する。
- 2 「主の御声には力があり」(詩篇29:4)「力」はゲブラーを象徴する。
- 3 「主の御声には威厳がある」(詩篇29:4) また、別の箇所「そのみ業は栄光と威厳に満ち、その義はとこしえにうせることがない」(詩篇111:3) とある。
「栄光」と「威厳」はホドを象徴する。
- 4 「主の御声は香柏を折り砕き」(詩篇29:5) イェソドを象徴する。
- 5 「主の御声は炎をひらめかす」(詩篇29:7)「ここに水と火の間に調停がなされる」
ティファレトは水と火の調停者である。
- 6 「主の御声は荒野を震わせ」(詩篇29:8) また、「主はその油注がれた者に、ダビデとその子孫に、永久に慈しみを加えられるでしょう」(詩篇18:50) とある。
永久はネツァクの象徴である。
- 7 「主の御声は樅の木を巻き上げ、また林を裸にする。その神殿で、総ての者は呼ばわって言う。『栄光』と」(詩篇29:9) 栄光はマルクトを象徴する。

困ったことに他の章では「十王」または「十の御言葉」として、別の配列を紹介している。

「最初は、至高の冠なり」(ケテル)

「第2は、智慧なり」(コクマー)

「第3は、トラーの源泉なり、智慧の宝箱、神の霊の源泉なり」(ビナー)

「第4は、神の慈悲なり、その真価、万物に対する慈愛なり。こは聖なる一者の右手なり」(ケセド)

「第5は、聖なる一者の偉大なる炎なり、かの左手なり」(ゲブラー)

「第6は、栄光の王座なり、戴冠し、礼拝さる場所なり」(ティファレト)

(48) Joseph Dan, *The Early Kabbalah*, New York: Paulist Press, 1986, pp.28f.

「第7は、アラヴォートの天なり」(マルクト)

「第8は、聖なる一者は、義なる者にして、万物の基礎なり」(イエソド)

「第9と第10は、二つの車輪(オフアニム)のようにして、第9は勝利の中の勝利(ネツァク ネットァキム)なり」(ネツァクとホド)

一方、これに対抗して、今日のセフィロト配置の根拠となるものは、旧約聖書の次の一文である。

「汝、主は偉大(ケセド)なり、力(ゲブラー)なり、美(ティファレト)なり、勝利(ネツァク)なり、威光(ホド)なり、天と地にある総て(イエソド)は汝がものなり。汝は王国(マルクト)なり、おお、主よ、しかして汝の頭部はそれら総てを越えてそびえり」(歴代誌上29:11)

そのため、三種類の配列が得られる。

	通常 of セフィロト配列	七つの御声と三つの御言葉	十の御言葉
1	ケテル	ケテル	ケテル
2	コクマー	コクマー	コクマー
3	ビナー	ビナー	ビナー
4	ケセド	ケセド	ケセド
5	ゲブラー	ゲブラー	ゲブラー
6	ティファレト	ホド	ティファレト
7	ネツァク	イエソド	マルクト
8	ホド	ティファレト	イエソド
9	イエソド	ネツァク	ネツァク
10	マルクト	マルクト	ド

次に興味深いのは、32の小径への言及だ。

「心臓(レヴ)は32である。これらは隠され、これらにより世界は創造された。

この32とは何であるか。曰『32の小径あり。そは多くの部屋の最奥にある王のようなものである。部屋の数32であり、その各々へ行く小径がある。(中略)王は娘に触れ、その身体と衣裳の中に総ての小径を含めたり」

「王」はザウイル・アンピンであり、「娘」はマルクトである。『光明の書』では、第1から第9番目のセフィロトまでの流出の過程を神の男性原理、第10番目のセフィラをそれに対する女性原理として捕え、神の臨在(シエキナー)を女王と娘という位相で解釈した。

次に面白いのは、四界の定義だろう。

「また、次のように書かれている。『私は彼らを我が栄光「アツィルト」のために創造し「ブリアー」これを造り「イエツィラー」これを仕立てた「アツィチャー」』(イザヤ書43:7)」

b 文献紹介

原典の全訳は、次のとおりである。解説書としては、前出のヨセフ・ダン『初期のカバラ』などがある。

- アレイ・カプラン 『バーヒル』
Kaplan, Aryeh. *The Bahir*, York Beach : Samuel Weiser, 1979.
- ヨアキム・ノイグロッセル「バーヒルより」『秘密の園』
Neugroschel, Joachim. "From the Bahir," in *The Secret Garden*, edited by D.Meltzer, New York : Seabury Press, 1976, 1998.

(5) ゴーハル伝承

a ゴーハルの編者

最も著名なカバラ文献は『セフェル・ハ・ゴーハル』又は、『光輝の書』である。

この書物は1290年、モーゼス・デ・レオンの手により編纂された。

出所原典については、今も議論が絶えない。モーゼス・デ・レオン自身は、2世紀のローマ帝国の治下にあった賢人シモン・ベン・ヨハイの遺した書であると主張している。

ラビ・シモンは所謂7賢者の一人であり、数々の伝説を纏う人物だが、この『ゴーハルの書』の中では中心人物の一人として神学を語り、秘密の教えを説いている。しかし、イスラエルのヘブライ大学でカバラの第一人者と言われた故ゲルショム・ショーレム博士の研究では、モーゼス・デ・レオンはカバラ学者の没個人的習性から古代の賢者の名を借りて、また、先行文書群を巧みに援用し、この『ゴーハルの書』を世に出したのだと結論づけている。レオン自身が『ゴーハルの書』の哲学的論述を補う書物を著していることなど、様々な文献学的考察がそれを裏付けている。⁽⁴⁹⁾

その後の文献学的検証においても、「神秘主義的ミドラシュ」の部分の殆どがヘブル語で書かれていることから、アラム語、ヘブル語混合の他の文書よりも古い年代に編纂されたという説があるが、『ゴーハルの書』を構成するトラクト群に統一された著者というものは存在しないという意見が主流である。

b ゴーハルの構成

今日、伝承されている『ゴーハルの書』は5巻構成である。それは必ずしも完全な書物としての形態を成していない。未完と思われる章もあれば、記載された言語でさえ不統一である（大半がアラム語、一部ヘブル語）。そのため完全な原本は今日想像もできないほど大部のものであって、我々はその断片しか目にしていないという伝説がまことしやかに語られてきた。⁽⁵⁰⁾

また、『ゴーハルの書』の5分の3は、「律法」（モーセ五書）への注解（1～3巻）であるが、ハイデルベルクの図書館に他の『旧約聖書』への注解部分が存在したという伝承もある。

カンディアのヤシャールことラビ・ソロモン・デルメギドは言う。

「信頼すべき筋によると、1620年のスペイン人によるハイデルベルグ市の強奪により、<ベト・エイカド・ハ・ロイム>学園から、各種言語の何千冊という書物が持ち出され、その中に24書に関する注解を著した膨大な『ゴーハルの書』があり、あるものはローマの枢機卿に、あるものはヴァバリア公に、他はスペインへと持ち出された。」（『タルモース・ホクマー』バーゼル、1629年）

しかし、この伝承の真偽判定は未来の歴史家に任せよう。

初期の『ゴーハルの書』は、手稿写本として流布していた。写本の宿命でもあるが、異本が多く、しかも、現在まで断片しか残存していない。

印刷物として出版されたのは、16世紀末からである。印刷本は、その出版形態から「ゴーハル」（Z）、「ティクネイ・ゴーハル」（TZ）及び「ゴーハル・ハダシュ」（ZH）の三種類から構成される。

(49) ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985年、247頁。

(50) たとえば「口伝によれば、この書物が完全に揃えば駱駝でないと運ぶことはできない。」(R. Gedalyah ibn Yachya, *Shalshet Ha-Kabbalah*, (Hebrew) Venice, 1587, p.31b.)

最初の「ゾーハル」については二系統存在した。

マントヴァ版（ZK：1558-1560年）は、「ゾーハル」に属する10の文書から編者ベネベントのイマニエルが良態と判断した文書を全三巻に分割して発行した。当時のカバリストは、これを次の巨大なクレモナ版と比較して『小さなゾーハル』（Zohar Katan）と呼んだ。

クレモナ版（ZG：1559-1560年）は、エリヤ・レヴィタとヴィットリオ・エリアーノが六つの文書を編纂した大判の一巻本である。マントヴァ版とは利用した原稿が異なる。これは版型の大きさから『大きなゾーハル』（Zohar Gadol）と呼ばれた。クレモナ版も、マントヴァ版と同様に誤植が多いが、マントヴァ版の方がまだ増しであるという評価がある。この『大きなゾーハル』は、ルプリン（1623年）及びスルズバハ（1684年）で再版された。ポーランドとドイツのカバリストは、十八世紀初期までクレモナ版を使用していた。

一方、「ティクネイ・ゾーハル」は、マントヴァ版（TZ：1558年）として、同じ編者イマニエルが一巻本で出版している。この書物は再版を重ねるが、ラビ・ハイム・ヴィタルが校正し、オルタコイ版（TZ：1719年）として、また、ラビ・ハイム・アルファンダリの手によりコンスタンチノーブル版（TZ：1740年）として、二種類の興味深い改版が出された。

また、「ゾーハル・ハダシュ」が最初に印刷されたのは、サロニカ版（ZH：1597年）であり、これはクラコウ（1603年）で再版された。この版は若干の修正を経てベニス（1658年）で三度再版される。

各ゾーハルを同時に編纂する試みは、『大ゾーハル』関連文書の追補及び「ゾーハル・ハダシュ」、「ティクネイ」文書を追加したアムステルダム版（Z、ZH、TZ：1715年）として出版された。

一方、マントヴァ版を校正したものは、コンスタンチノーブル版（Z、ZH、TZ：1736-37年）として出版された。

先述したように現存する最終版『ゾーハルの書』は、概ね次の五巻からなる。各巻の後に付したのは略称である。Z 1（「Zohar I」と書く文献もある。）は、第1巻を示す。⁽⁵¹⁾

第1巻：Z 1	律法に関する光輝の書（Sefer ha-Zohar al ha-Torah） 「創世記」に関する注解
第2巻：Z 2	律法に関する光輝の書 「出エジプト記」に関する注解
第3巻：Z 3	律法に関する光輝の書 「レビ記」、「民数記」及び「申命記」に関する注解
第4巻：TZ	光輝の書補遺（Tikkunei ha-Zohar）
第5巻：ZH	新光輝の書（Zohar Hadash）

これらの書物の中に多数の文書が収納されている。有名なものでは、ショーレムの整理した21通りの分類もあるが、⁽⁵²⁾ここでは後発研究のイザヤ・ティシュビーの分類に準拠して『ゾーハル』に整理する。⁽⁵³⁾

複雑なことに、必ずしも原型となった5巻本の順序に並んではない。その編纂状況の細

(51) Scholem, G. *KABBALAH*, New York: Meridian Books, 1978, page 213.

(52) ゲルショム・ショーレム 『ユダヤ神秘主義』 法政大学出版局、1985年、210-213頁。

ただし、ショーレムが『エンサイクロペディア・ユダイカ』に書いた解説では、さらに細分化して24通りになっている（Scholem, G. *KABBALAH*, New York: Meridian Books, 1978, pp.214-219.）。

(53) Tishby, *The Wisdom of the Zohar*, pp. 1-6.

部については、e項に引用したドン・カルの対照表を参照されたい。

- I 律法のゾーハル (Sefer ha-Zohar al ha-Torah : Z 1 ~ Z 3 及び T Z)
聖書の著述 (parashiyot) に関する神秘的なミドラシュ群であり、ゾーハルの主要部分を構成する表題のない注解である。
- II 雅歌へのゾーハル (Sefer ha-Zohar al Shir ha-Shirim : Z H 61d-75b)
聖書の『雅歌』の最初の詩句に対する神秘的解釈を開示する。構成は「律法のゾーハル」に似ている。
- III 神秘主義的ミドラシュ (Midrash ha-Ne'elam al ha-Torah : Z H 2d-26b、27b-28d、Z 1 97a-140a、Z 2 4a-5b、14a-22a Z Hの一部)
- IV 雅歌への神秘主義的ミドラシュ (Midrash ha-Ne'elam al Shir ha-Shirim : Z H 60a-61b)
聖書の『雅歌』の最初の詩句に対する神秘的解釈を開示する。短い解説のみで、その後の展開は記述されていない。
- V ルツ記への神秘主義的ミドラシュ (Midrash ha-Ne'elam al Ruth : Z H 75a-91b)
構成は「神秘主義的ミドラシュ」に似ている。
- VI 哀歌への神秘主義的ミドラシュ (Midrash ha-Ne'elam al ---- : Z H 91a-93d)
パレスチナとバビロニアのラビの応酬による文献解題
- VII 秘密のトーラー (Sitrei Torah : Z 1 74b-75a、76b-77a、78a-81b、97a-102a、107b-111a、146b-149b、151b-152a、154b-157b、161b-162b、Z 2 146a)
- VIII マツニティンとトセフタ (Matnitin Tosefta : Z 1 から Z 3 及び Z Hのなかに分散)
2世紀のハラハー文献に関するカバラ的解釈。
- IX ミシュパティムの古老 (Sava de Mishpatim : Z 2 94b-114a)
みすばらしい驢馬追いの姿をしたカバリストの達人の逸話。
- X 童子 (Yanuka : Z 3 186a-192a)
- X I 学院長 (Rav Metivta : Z 3 161b-174a)
- X II 秘匿の書 (Sifra di-Zeniuta : Z 2 176b-179a)
講和形式で『創世記』の最初の6章について注解する。
- X III 大集会 (Idra Rabba : Z 3 127b-145a)
ラビ・シモン・ベン・ヨハイが信徒を集めて、神秘的主題について議論する。最後の章において、信徒3名が恍惚死する。
- X IV 小集会 (Idra Zuta : Z 3 287b-296b)
ラビ・シモンの死を語る。
- X V 幕屋の集会 (Idra de-Vi Mashkana : Z 1 38a-45b、Z 2 244b-262b)

- XVI ヘハロート (Hekhalot : Z 1 38a-45b、Z 2 244b-262b、Z 2 262b-268b)
 神の7宮殿と邪悪の7宮殿に関する2部構成である。
- XVII 秘中の秘 (Raza de-Razin : Z 2 70a-75a)
 観相学と観掌学に関する論考。
- XVIII 文字の秘密 (Sitrei Otiot : Z H 1b-7b)
 神聖名と諸文字に関するラビ・シモンの独白。
- XIX 計量の基準 (Ma'amar Kav ha-Middah : Z H 56d-58d)
 イスラエルという基準の意味に関する神秘主義的解釈。
- XX エゼキエルの戦車の注解 (題名なし :)
- XX I 忠実な牧夫 (Raya Mehemna : Z 2 114a-121a、Z 3 97a-104a、108b-112a、
 121b-126a、215a-258a、270b-283a)
 トーラーの戒律と禁令に関するカバラ的解釈
- XX II ゴーハル補遺 (Tikkunei ha-Zohar : T Z 及び Z H 93c-122b)
 トーラーの最初の6章に関する70節に及ぶTikkunimトラクト
- XX III 忠実な牧夫とゴーハル補遺の2断片 (Z H 31a-35b、Z 1 22a-29a)

c デヌダータの編者

残念ながら『ゾーハルの書』は、長くユダヤ人以外の手に触れることはなかった。
 ヘブル語版からの翻訳は、最初、ラテン語訳で試みられた。

編者のクリスチャン・フライヘル・クノール・フォン・ローゼンロス (Christian
 Freiherr Knorr von Rosenroth) (1636~1689年) は、シレジア地方の牧師の息子として生まれ
 ました。かれは17世紀の傑出した神秘学者であり、ヨーロッパ遍歴の途次にヤコブ・ベーム
 の強い影響を受け、英国のヘンリ・ムーア、ベルギーのヴァン・ヘルモントらとも親交があ
 った。

かれはカバラにも造詣が深く『ゾーハルの書』からルリア派の文献に至る広範な原典を獵
 歩し、3巻本『カバラ・デヌダータ』を編纂したことで有名である。晩年は、ヴァーバリア
 選定侯クリスチャン・アウグストの助言者としても活躍した。

主要な著作は、次のとおり。

- 1672年 『靈魂の存在に関する唯一の論文』
 (Dissertatio singularis de existentia animarum)
 『福音の調和』 (Harmonia Evangeliorum)
- 1677年 『カバラ・デヌダータ 第1巻』 (Kabbala Deunudata I)
- 1678年 『カバラ・デヌダータ 第2巻』 (Kabbala Deunudata II)
- 1684年 『カバラ・デヌダータ 第3巻』 (Kabbala Deunudata III)
 『ゾーハルの書集成』 (Liber Sohar sive Collectanea)
 『シリア版新約聖書』 (Novum Testamentum Syriace)

d デヌダータの構成

これまで長らく絶版であり、名前のみ高く目にする機会が無かった『カバラ・デヌダータ』が2巻本で再刊された（原典は3巻本）。原典のファクシミリ出版であり、構成、図版等はそのままである。いわゆるコレクターズ・アイテムであろう。この書物は17世紀以降のキリスト教カバリストたちの聖書であった。自分でヘブル語原典をあたる能力がなくても、ラテン語さえ読めれば（当時の教育を受けた紳士は、ラテン語が読めた。）カバラの詳細な中身に触れることができるのだ。おまけに『ゾーハルの書』の一部が対訳つきで掲載されており、非常に便利なアイテムであった。

この書物の英語訳は、いずれも部分訳だが2種類出ている。

ひとつは『エシュ・メツレフ — 浄化された炎』であり、これは『デヌダータ』第1巻に細切れに掲載された原典を再編集したものである。16世紀頃にヘブル語かアラム語で著されたユダヤの錬金術の著作である。残念ながら原典は散逸しており、ラテン語訳しか残っていない。⁽⁵⁴⁾

もうひとつは、英語圏のオカルティストに強い影響を与えた『ペールを脱いだカバラ』である。マグレガー・マサースの英訳した同書は、最近、判田格氏の翻訳により日本語訳が出版されている。

同書は、第2巻第2部に掲載された『ゾーハルの書』の部分対訳（ヘブル語～ラテン語）『隠された神秘の書』、『大聖集会』及び『小聖集会』に、前後の論文からの解説を付け足して作成したハンディな入門書となっている。

もちろん、ヘブル語原典の入手が容易になった今日では、ラテン語からの「また訳」を参照する必要が少なくなり相対的な価値は低下している。しかし、17世紀から19世紀の研究者には、必読の書であった訳であり、その影響力を無視して文献精査をする訳にはいかならう。

第1巻

索引及び辞書
ラテン語早見表
聖書索引
レキシコン

公開論争 (Contenta Exhibit)

- 1 ゾーハル概観 (De Versione Sohar)
- 2 カバラ的図表 (Tabulae Kabbalastica)
- 3 数とセフィロト (Ratio Nominum & Sephirarum)
- 4 第1のトラクト・ドルスキムの書 (Tractus 1 Libri Druschim)
- 5 質疑及び考察・ドルスキムの書 (Quaestiones in Tract Libri Druschim)
- 6 女友達の返書 (Amica Responsio)
- 7 霊魂のトラクト (Tractus de Anima R. Moscheh Korduero)
- 8 カバラ的命題 (Theses Cabbalisticae)
- 9 女友達の返書に対する追加質問
(Ulterior Disquistio de rebus in Amica Responsione contentis)
- 10 メルカバ解明 (Mercavae Expositio)
- 11 カバラ的問答 (Catechismus Cabbalisticus)
- 12 基礎哲学 (Fundamenta Philosophiae sive Cabbalae Aeto-Paedo-Melissae)

(54) Patai, Raphael. *The Jewish Alchemists*, Princeton: Princeton University Press, 1994, pp. 322-335.

天界の門 (Porta Coelorum)

編者序文 (Praefatio Editoris ad Lectorem)

第1の論文 (Dissertatio Prima)

第2の論文 (Dissertatio Secunda)

第3の論文 (Dissertatio Tertia)

第4の論文 (Dissertatio Quarta)

第5の論文 (Dissertatio Quinta)

第6の論文 (Dissertatio Sexta)

第7の論文 (Dissertatio Septima)

第8の論文 (Dissertatio Octava)

木の図版に関する詳細解説 (Continet Explicationem Arborum seu Tabularum)

図表1 (Figura I)・・・円形の木

図表2 (Figura II)・・・上下二つの円形の木

図表3 中央の柱 (Figura III Columna Media)

図表4 中央の柱 (Figura IV Columna Media)

図表5 (Figura V)

図表6 第1の柱 (Figura VI Columna principalis)

図表7 第1の柱 (Figura VII Columna principalis)

図表8 (Figura VIII)

図表9 (Figura IX)

図表10 (Figura X)

図表11 (Figura X I)

図表12 (Figura X II)・・・有名な横顔の図版

図表13 (Figura X III)・・・中央分割された木の図版

図表14 (Figura X IV)・・・アイン・ソフから多重分岐していく複数の木

図表15 (Figura X V)・・・内接円で解説される木

図表16 (Figura X VI)・・・照応する複合木の図版 (黄金の夜明け団が多数引用)

第2巻

序文 (Praefatio ad Lectorem)

第1部 (Parte Prima)

I 第1のトラクト『ゾーハルの書の大要』(Synopsis Liber Sohar)

第1の標題 光の法 (Titulus Primus. Lumen Legis)

第2の標題 祈りの家 (Titulus Secundus. Domus Precum)

第3の標題 施しの小径 (Titulus Tertius. Semita Eleemosynarum)

第4の標題 贖罪の門 (Titulus Quartus. Porta Poenitentiae)

第5の標題 審判の順序 (Titulus Quintus. Ordo Iudicii)

第6の標題 貞潔と神聖の門

(Titulus Sextus. Porta Castitatis & Sanctitatis)

第7の標題 祭壇の作業 (Titulus Septimus. Opus Mensae)

第8の標題 過越しの祭について (Titulus Nonus. De Festo Paschatos)

第9の標題 正しい小径 (Titulus Decimus. Semita Justorum)

第11の標題 応報の門 (Titulus Undecimus. Porta Retributionis)

第12の標題 欲望の門 (Titulus Duodecimus. Porta Concupiscentiae)

第13の標題 霊の門 (Titulus Decimus Tertius. Porta Spirituum)

第14の標題 イスラエルの地の優越について

(Titulus Decimus Quartus. De Excellentia Terrae Jisraelis)

第15の標題 祖国の偉業 (Titulus Decimus Quintus. Gesta Patrum)

第16の標題 死の門 (Titulus Decimus Sextus. Porta Mortis)

第17の標題 神殿について (Titulus Decimus Septimus. De Sanctuario)

第18の標題 教綱要理の門

(Titulus Decimus Octavus. Porta Collectaneorum)

第19の標題 印章の歴史 (Titulus Decimus Nonus. Historiae Insignes)

II 第2のトラクト『ゾーハルの書入門』 (Introductio Libri Sohar)

第1節 原初の無限宇宙について (Sectio Prima. De Mundo Infiniti primo)

第2節 アウィル・カドモン (Sectio Secunda. AVIR QDMVN)

第3節 文字ヨドの名前 (Sectio Tertia. Sectio literae Jod Nominis)

第4節 隠された最初のアダムについて

(Sectio Quarta. De Adamo primo occulto)

第5節 輝ける球 (Sectio Quinta. Sphaera Splendoris)

第6節 創造のわざ (Sectio Sexta. Operis Creationis)

第2部 (Parte Secunda)

I 第1のトラクト『隠された神秘の書』 (Liber Mysteriorum seu Occultationis)

II 第2のトラクト『大聖集会』 (Synodus Magna Sancta)

III 第3のトラクト『小聖集会』 (Synodus Minor Sancta)

IV 第4のトラクト『隠された神秘の書注解』 (Commentarius in Librum Mysteriorum)

V 第5のトラクト『神秘の書及び聖集会に関する一般注解』

(Commentarius generalis in Librum Mysteriorum & Synodos)

VI 第6のトラクト『三篇の初期断章』 (Tres Discursus initiales)

第3部 (Parte Tertia)

I 第1のトラクト『カバラ的氣息論』 (Pneumatica Kabbalistica)

II 第2のトラクト『靈魂の進化について』 (De Revolutionibus Animarum)

注：() 内は『デヌデータ』に示された略称を用いている。

現代ラテン語と表記の異なる単語が混入しているので注意されたい。

e 文献紹介

ゾーハルの全体像を文献で追うのは不可能に近いので、簡潔に現在も入手可能(参照可能)な比較的最近の文献について言及する。

なお、書名の末尾に示した大文字の略称は、ドン・カルの『英語版ゾーハルへの注記』に準拠した著訳者略語であり、カル作製の文節別ゾーハル対照表の書名略語としても用いる。

ゾーハル原典の略称については、b項で述べたように古来の分類に従って、『ゾーハル』(Z)、『ゾーハル・ハダッシュ』(ZH)、『ミドラシュ・ハ・ニーラム』(Mh-N)、『雅歌』(S of S)、『columns』(cols)、『注解』(comm) 及び『哀歌』(Lament) などのように略する。

- ミューラー『ゾーハル：カバラーの聖典』法政大学出版局、2012年。

エルンスト・ミューラーの抄訳(ドイツ語)からの邦訳である。

- ティシュビー『ゾーハルの智慧』全3巻(IT)

Tishby, Isaiah. with Lachover, Fischel. *The Wisdom of the Zohar: An Anthology of Texts*. 3 volumes [The Littman Library of Jewish Civilization]

Hebrew original: Mishnat ha-Zohar, vol. 1, 1949; vol. 2, 1961.

English translation by David Goldstein: 1989, Oxford University Press for The Littmann Library, Oxford. Paperback Edition: 1991. (<http://www.littman.co.uk/>)

本書は、項目別のアンソロジー形式で編纂されている。

ヘブル語版の『ミシュナー・ハ・ゾーハル』(Mishnat ha-Zohar) は、第1巻(1949年)、第2巻(1961年)と刊行され、英語版は1989年に出版された。各項目はティシュビーの解説に始まり、各説の翻訳には脚注が付されている。引用文は1, 2頁程度だが、ヤヌカー、サバ、ヘハロートの最初の部分は、ほぼ全節が訳されている。

このアンソロジー本は、研究の第1歩として、関連項目を参照しつつ『ゾーハル』全体を学習するのに最適の書物である。イザヤ・ティシュビーは1992年に亡くなるまでヘブライ大学の名誉教授を務めていた。全3巻で1654頁の大冊である。

- 部分訳『ゾーハル』全5巻(S S L)

Simon, Maurice; Sperling, Harry; and Levertoff, Paul. *The Zohar*. [5 volumes]

London: Soncino Press, 1941-1944.

本書は、1931年から34年に出版され、約70年に渡り、英訳ゾーハル(部分訳)の基本テキストとして流布した。「ソンシノ版ゾーハル」(The Soncino Zohar)である。ここでは、3人の英訳者サイモン、スパーリング、レバートフの頭文字を取りS S Lと略称する。

ショーレムは『ユダヤ神秘主義』において、次のように評価した。

「必ずしも正確ではない英語訳だが、ゾーハルの性格について明確な印象を伝えてくれる。残念ながら訳者たちはゾーハルの構成に関して完全に誤った想定から出発したために、余りにも多くの部分を省略してしまった。しかし、いずれにせよ、この堅実で手際のよい訳には、フランス人の訳者ポーリー(Jean de Pauly)が犯したような無数の意識的な歪曲は認められない。」⁽⁵⁵⁾

(55) ゲルシヨム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985年、214頁、索引(72)頁。

構成は、次のとおり。ヘブル語の各章の題名は、ベレシトは創世記であり、メゾラはらい病であるなど創世記、レビ記、民数記の内容に関連している。詳細は割愛する。

- 第1巻 序文 ベレシト ノア レク・レカ ヴァエラ
- 第2巻 ハイ・サラ トルドス ヴァイエゼ ヴァイシャラ ヴァイエシェブ
ミクズ ヴァイガシュ
- 第3巻 シェモス ワエラ ボー ベシャラ ジェトロ ミシュパティム テルマー
- 第4巻 テルマー (続) テザワ キチサ ヴァヤケル ピクード ヴァイキラ
ザブ シェミニ
- 第5巻 『レビ記』 カイ・タズリア メゾラ アーレ・モス ケドシム エモル
ベハル ベフコサイ
『民数記』 ベミドバル ナソ ベハ・アロテカ シェラ・レカ コラ フカス
バラク ピンハス
『申命記』 ヴァエタナン ヴァエレク ハジヌ

書籍版とCD-ROM版がある。CD-ROM版は翻訳範囲の拡大、ヘブル語、英語版聖書、ラシの注解が付属している。

出版社は、www.soncino.com である。

● 完全版原典『ゾーハル』全23巻 (KCO)

国際カバラ・センターによる完全版原典ゾーハルは、アラム語、ヘブル語原典とラビ・イエフダ・アシュラグ (1993-2001) による注解 (Ha Sulam、梯子) を含む全23巻である。この注解書『梯子』は、1945年から55年にかけてエルサレムで出版された。

イザヤ・ティシュビーは、『梯子』について「ルリアの体系に基づいて注釈されており、語句の意味を理解する上でも助けになる。科学的な視点からすると、この注解は関連するテキストの組織を追跡し、原典と関連文書を結びつける上で重要な役割を果たしている。」⁽⁵⁶⁾ アシュラグの注解は、セフィロト、パルツフィム等のルリア学派の発展的概念にも言及している。

第3巻以降の各章は、章の始めに内容の要約を含んでいる。

出版社は、www.kabbalah.com である。

● 完全版英訳『ゾーハル』全23巻 (KC)

Rav Shimon bar Yohai. *The Zohar, 1-23*. New York : The Kabbalah Centre, International., 2003.

国際カバラ・センターによる完全版英訳ゾーハルは、『ゾーハル』本文と英語訳の対訳形式になっており、前出の注解を含む全23巻である。責任編集ラビ・ベルグの序文によれば、この書物は学問的研究として出版されたのではなく、明解さ、論理的説明のために短縮され、変質されることのないように、通俗的なものではなく、文学的な翻訳を行うことにあると言う。

従って、編纂されたトラクトの構成は過去の先例を踏襲しておらず、ITなどと対比して読む際は、若干の不満が残る。

● 完全版英訳『ゾーハル』総巻数不明、2013年1月現在 第1巻のみ出版 (MM)
Miller, Moshe. *Zohar. Selections Translated and Annotated by Moshe Miller*.
Morristown : Fiftieth Gate Publications and Seminars, 2000.

(56) Tishby, *The Wisdom of Zohar*, p.105.

2000年に第1巻が出版されたばかりの新訳全巻プロジェクトが、第50門出版からモーシェ・ミラー編集翻訳で出版された『ゾーハル』である。序文には「歴史的背景」、「ゾーハルの構成」、「ゾーハルの神秘的意義」などの解説が付されている。

ただし、ミラーは翻訳においてSSLやKCが踏襲したように、『ゾーハル』の1巻1章から始めなかった。かれは節を聖書の順序に並べた。しかも、『ゾーハル』だけでなく、『ゾーハル・ハダシュ』や『ティクネイ・ゾーハル』からも関係部分を集めて並べている。

訳文に対応する注解には、古来の複数の権威を並べてある。

この『ゾーハル』は、コルドヴェロの『椰子の木』などを出版した、第50門出版及びセミナー社から出されている。URLは、www.fiftiethgate.com である。

- アラム語版『ゾーハル』全12巻予定、2013年1月現在第7巻まで出版中 (PE)
THE ZOHAR: PRITZKER EDITION
Translated and Edited by Daniel Matt, Stanford University Press
<http://www.sup.org/zohar/index.cgi>

2003年に第1巻が刊行されたスタンフォード大学の新プロジェクトである。

13世紀にスペインで編纂された当時のアラム語版『ゾーハル』を翻訳する試みであり、第1巻には、同じくスタンフォード大学出版から刊行されたアーサー・グリーン解説書PRITZKER EDITION: *A Guide to the Zohar* の要約版が掲載されている。

学問的な批評を経た完全版として、期待の持てる作品である。

- ローゼンベルグ『神の解剖学』(RR)
Rosenberg, Roy A. *The Anatomy of God*. New York: Ktav Publishing House, 1973.
- ピンハス・ギラー『ゾーハル読解 カバラの聖なる書』(PG)
Giller, Pinchas. *Reading the Zohar: The Sacred Text of Kabbalah*.
New York: Oxford University Press, 2001.

本書において、ギラーはサフェドのカバリスト、コルドヴェドロ、特にルリアがどのように『ゾーハル』を解題したかを検証している。付録に『秘められた書』及び『大集会』の翻訳を含む。

- ラファエル・パタイ『古への都市への門』(P(G))
Patai, Raphael. *Gates to the Old City: A Book of Jewish Legends*.
New York: Avon Books, 1980.
- ラファエル・パタイ『メシアーのテキスト』(P(M))
Patai, Raphael. *The Messiah Texts*.
New York: Avon Books, 1979
- S・G・ワルド『神聖名のドクトリン』(SGW)
Wald, Stephen G. *The Doctrine of the Divine Name: An Introduction to Classical Kabbalistic Theology*. [Brown Judaic Studies, No. 149] Atlanta: Scholars Press, 1988.

本書には『シトラ・オティヨート』の前半部の翻訳を含む。

- イサク・マイヤー『カバラ』(Myer)
Myer, Isaac. *Qabbalah*. Philadelphia : privately printed, 1888.
reprinted, New York: Samuel Weiser, 1974.
reprinted, San Diego: Wizards Bookshelf, 1988.

本書には、第3、4、18、19、20章及び別紙Aに『ゾーハル』の翻訳を含む。

- ダニエル・マット『ゾーハル 光明の書』(DM)
Matt, Daniel C. *Zohar – The Book of Enlightenment*.
[The Classics of Western Spirituality] Ramsey : Paulist Press, 1983.
- フィリップ・ベルグ『ゾーハル：パラシャット・ピンハス』全3巻 (P S B)
Berg, Philip S. *The Zohar: Parashat Pinhas*. [3 volumes]
Jerusalem: Research Centre of Kabbalah, 1987-1988.

国際カバラ・センターが、ラーヤ・メヘムナの主要な部分
(KCの第20～第21巻に相当)を訳したのが本書である。

第1巻：Z 3 (213a-229b) 及び序章
第2巻：Z 3 (229b-245b)
第3巻：Z 3 (246a-259a) 及びインデックス

- イングランダー&バッサー『ルツの秘儀の研究』(E w B)
Englander, Lawrence A., with Basser, Herbert W.
The Mystical Study of Ruth: Midrash ha-Ne'elam of the Zohar to the Book of Ruth.
[South Florida Studies in the History of Judaism # 75]
Atlanta : Scholars Press, 1993.

本書には、『ミドラシュ・ハ・ニーラム』の翻訳を含む。

- セツ・ブロッディ『ゾーハル・ハダシュ：哀歌の注解』(S B)
Brody, Seth (trans.). “Zohar Hadash: Commentary on Lamentations,” in
R. Ezra ben Solomon of Gerona. *Commentary on the Song of Songs and Other Kabbalistic
Commentaries*. Kalamazoo : Western Michigan University, 1999.

本書には、『哀歌』の翻訳を含む。

- ローゼンロス『カバラ・デヌダータ』
Christian Freiherr Knorr von Rosenroth. *Kabbala denudata*. New York : Olms, 1999.
(初版 : Nachdruckauflage der Ausgabe Sulzbach 1677-1684)

- ネットワーク上での『ゾーハル』の公開
幾つかのサイトにおいて、ゾーハルの原文、一部訳が公開されている。
書籍と異なり、変化が激しいので、その一部のみ紹介する。

☆ ブナイ・バルフ <http://www.kabbalah.info/>

☆ ルリア派カバラセンター <http://www.kabbalah-arizal.nl/>

次に各書籍の相関を示す。なお、現在刊行中のものはフォローしていない。

ゾーハルの該当章、頁		旧訳書	編纂	新訳書
a. commentary on the Torah		SSL	IT ⁽⁵⁷⁾	KC:1-22
b. SifredeTzeniut	Z2 176b-179a	RR	PG	KC: 11
c. Idra Rabba	Z3 127b-145a	RR		KC: 17
d. Idra Zutta	Z3 287b-296	RR		KC: 22
e. Idra de bi Mashkana⁽⁵⁸⁾	Z2 127a-146	RR	PG	KC: 11
f. Hekhalot	Z1 38a- 45b		IT ⁽⁵⁹⁾	KC: 2
	Z2 244b-262			KC: 13
g. Raza de Razin	Z2 70a- 76b	SSL		KC: 10
	Z2 76b- 78a			KC: 10
	ZH 35b- 37c			
h. Sava	Z2 94b-114a	SSL	IT ⁽⁶⁰⁾	KC: 10
i. Yenuka	Z3 186a-192a	SSL	IT	KC: 19
k. Rav Methivtha	Z3 161b-163a	SSL		KC: 18
	Z3 163a-174b ⁽⁶¹⁾			KC: 18
l. Sithre Torah parallel cols	Z1 15a- 22b	SSL		KC: 1
	74b- 75a			
	76b - 77a			
	78b - 81b	P(G) ⁽⁶²⁾		
	88a- 90a	P(G) ⁽⁶³⁾		
	97a -102a		Myer ⁽⁶⁴⁾	
	107b -111a			
	146b -149b	P(G) ⁽⁶⁵⁾	DM ⁽⁶⁶⁾	
	151b-152a			
	154b-157b			
	161b-162b			
	Z2 146a			
	m. Mathnithin	Z1 64a,74,97,100b,107b, 121,147,151, 154,161b, 165,232, 233b, 251		
Z2 4a,12b,68b,74, 270b				
Z3 49,73b				
ZH 1d,3a,122b,195a				
n. ZtoSongofSongs	ZH 61d- 75b			

(57) 原典脇注からの多数の注釈を利用している。

(58) この「幕屋の集会」の構成は錯綜している。ゲルシヨム・ショーレムは、Z 2 127a-146b (SSL版に含まれる。)と判別したが、ローゼンベルグがマントヴァ版に準拠して、Z 2 122b-123b (SSL版になし。)と結論し、ギラーは同書が失伝したと考えている。

(59) Z 1 41a-45b、I T 597-614頁を参照。

(60) Z 2 94b-99b, 103a, 106a-b、I T 177-97、517、1511-1513頁を参照。

(61) ラビの幻想の部分に関する記述について、マースキーはマルゴリオス版を根拠にZ 3 332-335頁を挙げているが、マントヴァ版ではZ 3 299bとなる。I T 672-673、784-785、794-795頁を参照。KC 17巻及び18巻を参照 (ラビの幻想の件は18巻の112-130頁。)

(62) Z 1 81b、P(G) 427頁を参照。

(63) Z 1 89a-90a、P(G) 484-485頁を参照。

(64) Z 1 97a, 98b, 99a 100a、Myer 427-428頁を参照。

(65) Z 1 148a-b、P(G) 461-462頁を参照。

(66) Z 1 147a-148a、DM 75-79頁を参照。

o. Kav ha-Middah		ZH 56d- 58d			
p. Sithre Othioth		ZH 1b- 7b	SGW		
q. comm.On Ezekiel		ZH 37c-41b		IT ⁽⁶⁷⁾	
r. Midrash ha-Neelam		Z1 97a-140a	P(GM) ⁽⁶⁸⁾	IT ⁽⁶⁹⁾	KC: 3-4
		Z2 4a- 5b	SSL		KC: 8
		14a -22a	SSL	IT ⁽⁷⁰⁾	KC: 8
		35b-40b	SSL		KC: 9
		ZH 2b- 26b		DR ⁽⁷¹⁾	
		27b -28d		IT ⁽⁷²⁾	
s.	M h-N onSof S	ZH 60a- 61d			
	M h-N onRuth	ZH 75a- 90b	EwB		
	M h-N onLame	ZH 91a- 93b			
t. Raya Mehemna		Z2 40b- 43b	SSL	IT ⁽⁷³⁾	KC: 9
		114a-121a		IT ⁽⁷⁴⁾	KC: 10
		Z3 97a-104a	SSL		KC: 16
		108b-112a			KC: 16
		121b-126a	SSL	IT ⁽⁷⁵⁾	KC: 17
		215a -258a	PSB		KC:20-1
		270b-283a		IT ⁽⁷⁶⁾	KC: 22
u. Tikkunei Zohar		Z1 22a- 29a	SSL		KC: 1
v. additions to q.		ZH 31a- 35b			
		93c-122b			
w. Ta Hazei		ZH 7a			

注：1 略語一覧

- DM : Daniel Matt. *Zohar – Book of Enlightenment*.
DR : David Rosenberg. *Dreams of Being Eaten Alive*.
E w B : Englander with Bassar. *The Mystical Study of Ruth*.
I T : Isaiah Tishby. *The Wisdom of the Zohar*.
K C : Kabbalah Centre International. *Zohar* (数字は巻番号) .
Myer : Myer. *Qabbalah*.
P (G) : Patai. *Gates to the Old City*.
P (GM) : Patai. *Gates to the Old City and The Messiah Texts*.
P G : Pinchas Giller. “Appendix” to Reading the Zohar.
P S B : Phillip S. Berg. *The Zohar: Parashat Pinhas*.
R R : Roy Rosenberg. *Anatomy of God*.
S B : Seth Brody. “Zohar Hadash: Commentary on Lamentations”

(67) Z H 38a, 38a-b, 38d, 39d-40a, 41a、 I T 619, 492-493, 619-620, 643-645, 615参照。

(68) Z 1 98a-99a、 P(G) 496-497頁を参照。 Z 1 135b-136a、 P(M) 243-245頁を参照。

(69) 多数の該当項目あり。

(70) 多数の該当項目あり。

(71) Z H 26b、 18d-19a、 DR 90-91及び95-97頁を参照。

(72) 多数の該当項目あり。

(73) Z 2 40b-41a, 42b-43a、 I T 1317, 265-266頁を参照。

(74) 多数の該当項目あり。

(75) Z 3 124a-126a、 I T 1147-1154頁を参照。

(76) Z 3 275b-285a、 I T 262-5頁を参照。

S G W : S.G.Wald. *The Doctrine of the Divine Name.*
S S L : Simon, Sperling, and Levertoff. *The Zohar.*

2 『ゾーハルの書』自体の略称

Z : *Zohar*
Z H : *Zohar Hadash*
M h-N : *Midrash ha-Neelam*
S of S : *Song of Songs*
cols : columns
comm : commentary
Lament : Lamentations

実践講座

5 呼吸の基礎

(1) 呼吸の仕組み

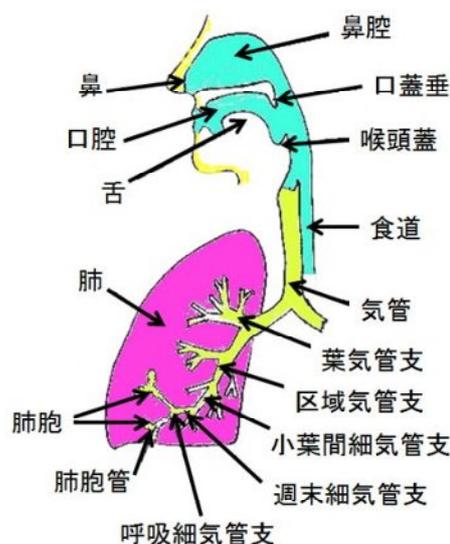
人間は食を断れば数週間で、水を断れば（環境によるが）数日間で、死亡する。しかし、呼吸を断れば数分間しか持たない。呼吸は死活的かつ緊急に重要であるが、あまりにも当たり前の行為であるため、その重要性が忘れられがちである。

呼吸は、外呼吸（肺呼吸）と内呼吸（組織内呼吸）に2分されるが、本稿で検討するのは外呼吸のみとする。人体の呼吸器官を略図で示すと右図のようになる。鼻孔及び口腔部という外界への開口部を一端とし、喉頭蓋を通過し、気管に入り唯一のガス交換臓器である肺に至るのが呼吸器系の分岐図である。

気道と呼ばれる空気の通路は、週末細気管支のあたりでは、肺胞内に微細な筋として広がり、あたかも気脈が根を張ったように見える。

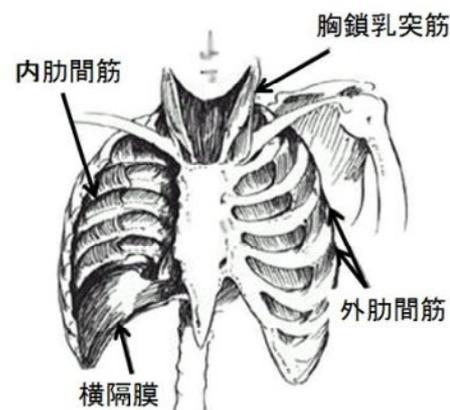
さて、肺は頑丈なフィゴのようなものであるが、このフィゴそのものには動力機構はついていない。呼吸運動を行う主役は、「呼吸筋」と呼ばれる胸郭に張り巡らされた筋肉である。

呼吸筋の働きで横隔膜が収縮すると、胸腔が広がり内部の圧力が減少する。圧力を等しくするため空気が肺に入る。横隔膜が弛緩すると、胸腔が狭くなるので内圧が高くなり、肺から外に空気が押し出される。実に単純な話であるが、これが生涯続くのである。



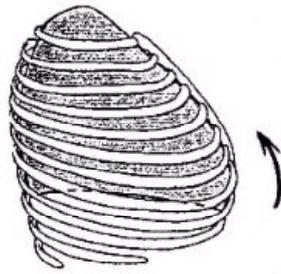
広義の呼吸筋は次のとおりである。

- 主呼吸筋：呼吸運動に主要な役割を果たす。
肋間筋（内肋間筋、外肋間筋）及び
腹筋（腹横筋、腹斜筋、腹直筋）
- 呼吸補助筋：呼吸筋としても役割をもつ。
斜角筋及び胸鎖乳突筋
- 姿勢筋：換気運動への関与がある。
吸息性：僧帽筋、大胸筋、小胸筋及び横方形筋
呼息性：広背筋及び胸横筋

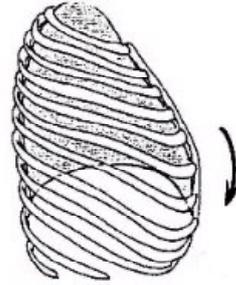


成人男性は、肺の内部に約2500ccの空気を蓄えている。毎回約500ccの空気を呼吸で交換するので、肺の内容積は約2000～3000ccの間で変動する。深呼吸した場合は、さらに振幅が大きくなり、約1000～4500ccの幅で変動する。この呼吸運動は、呼吸筋により胸腔の容積が変化することで起こる。

吸息運動（息を吸う運動）を例にとると「胸郭挙上」及び「横隔膜沈下」に分解できる。胸郭挙上運動は、外肋間筋及び軟骨間筋の収縮により発生する。



外肋間筋の収縮
胸郭の挙上



外肋間筋の収縮
胸郭の下降

この筋肉運動により、胸囲が増加する。主に上方の肋骨部では主として前方へ、下位肋骨部では主として側方に拡張される。これは胸と肋骨のみの運動であり、胸腔の前後左右、あるいは上方への拡大が生じ、気道から呼吸が流入する。

横隔膜沈下運動は、横隔膜収縮により左右の円蓋部が、僅かに沈下し、下方に胸腔の拡大が起こり、さらに約300ccの空気が吸入される。

深呼吸をした場合は、さらに補助吸息筋が加わる。

(2) 腹式呼吸と胸式呼吸

第2ヶ月目の瞑想で、基本的な呼吸法を実践した。その際、呼吸の大切さ、肉体と精神に及ぼす強い影響力を実感できたと思う。これから実践的な呼吸法について、考察する。

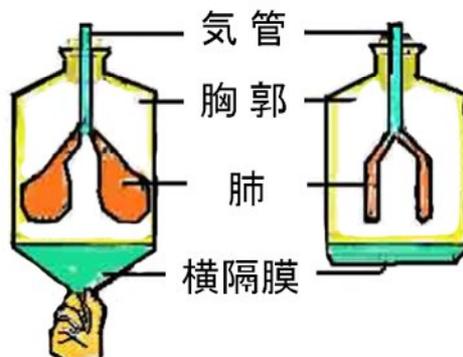
良く聞く言葉であるが「腹式呼吸」と「胸式呼吸」の差が理解されているだろうか。

この二つは医学的、生理学的に定義された言葉ではない。しかし、武道、スポーツ、健康管理等の様々な分野で、腹式呼吸を心がけなさいと言われる。

魔術の訓練では一般に鼻腔で呼吸を行う。鼻の奥が脳底部と近いので、正しい呼吸は鼻腔で行う。むろん、強い振動を伴う聖名の発声時などは、口から強く吐く場合もある。

さて、鼻腔から肺に落ちた空気は、柔軟なフイゴのような肺を膨らます。前項で述べたように、肺そのものに筋肉がある訳ではない。この空気袋を膨らませたり、しばめたりするのは、呼吸筋による肺の下部に位置する横隔膜の上下動と、肋骨で構成される胸郭の拡大収縮である。

誤解を恐れずに単純化すれば、主として横隔膜を用いる呼吸が腹式呼吸で、肋骨を用いる呼吸が胸式呼吸である。それを図式化したものが、有名なヘーリングの模型である(下図参照)。

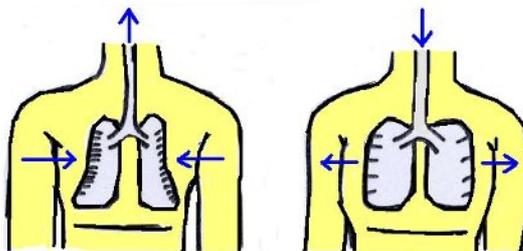


a 胸式呼吸（肋骨呼吸）

普通の都会人の呼吸は浅く早い。それは肋骨が僅かばかり上下する胸式呼吸で、肺活量のごく一部分しか使用していない。現代では、声楽の訓練を受けた者や、武道の心得がある者を除いて、殆どの人間は浅い「胸式呼吸」を行っている。それは胸（肋骨）が上下動するだけ、いわば、胸郭の水平移動による呼吸である。

その原因は、横隔膜を殆ど使わず、胸の呼吸筋を主に使う呼吸であることだ。胸の回りの呼吸筋は、肋骨の下にあり、動かしにくく、肺も膨らみにくい。

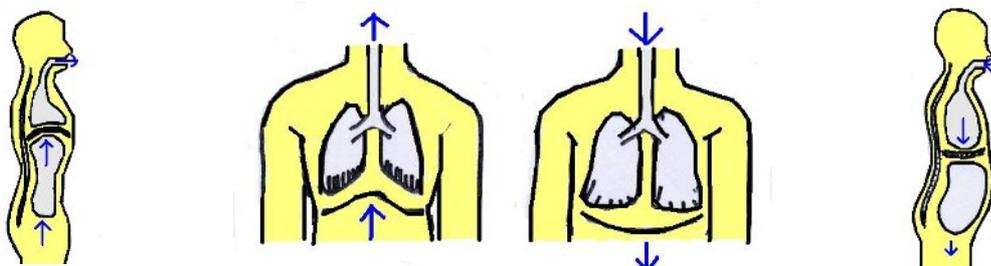
また、胸式呼吸ばかり長期間続けると、胸が圧迫され、周辺の筋肉が動かなくなり血行が悪くなる。浅い呼吸が習慣化する。酸素が脳や心臓などの重要な臓器に十分に補給されなくなる。



b 横隔膜呼吸（腹式呼吸）

ところが、正しく呼吸のトレーニングを積むと横隔膜の上下動を伴う「複式呼吸」を行うことができる。肺は左右伸縮と同時に上下に伸縮し、その本来の最大容量で呼吸できる。容量いっぱい膨張した肺臓は、普段使われない肺組織の下部の細胞でガス交換を実施し、強烈な生命力が喚起される。

腹式呼吸の特徴は、横隔膜の動きが大きく、胸部（肺）を縦に広げる運動になることだ。



<呼息時>

横隔膜上昇、腹腔凹

横隔膜下降、腹腔凸

<吸息時>

また、人間は直立動物なので人体の血液は下部に溜まりやすい。

腹式呼吸は肺の下部を使う呼吸なので、少ない呼吸回数で効率の良いガス交換ができる。

また、宇宙飛行士が無重力の空間で頭部がむくむと言われる。これは普段は下半身に血液が溜まっている証拠である。この血液は下腹部に静脈血として滞留し、細胞老化の原因にもなっている。腹式呼吸は、この滞留した淀んだ血液を散らす効果もある。

本来、子供たちは腹式呼吸をしている。子供のおなか呼吸とともに上下する。しかし、大人になるとともに全力で駆け回ることなくなり、浅くて早い胸式呼吸に退化していくのだ。腹式呼吸の副次的効果として、横隔膜が自律神経を刺激し、血行を促進する。内臓の活性化、冷え性、肩凝りなどの改善も期待できると言われている。

あなたは普段から腹式呼吸を心がけてもらいたい。

吐くときは腹が引っ込み、吸うときは腹が出るのが正しい呼吸である。深くゆっくりとした腹式呼吸を続けていけば、身体の活性化にもつながるのである。

6 リズム呼吸（四拍呼吸法）

（1）リズム呼吸の意味

リラックスと併用すると著しい効果が生まれるのがリズム呼吸である。ここでも、魔術士に成ろうとしているのに何故、呼吸法を学ぶのか疑問に感じる者がいるだろう。しかし、人間の体は、空気と水と食物、そして様々なエネルギーを摂取しながら生きている事を思い出してもらいたい。このなかでも、僅か数分間欠如しても死んでしまうのは空気である。正しい呼吸が、精神と肉体に影響を及ぼすのは蓋し当然のことである。

チベットのある僧院では、導師は志願者に向かってこう教示する。「壁に向かって座りなさい。そして、貴方の呼吸を数えなさい。これがすべてです」

単純なことだろうか、人は呼吸を意識して行わない。まして、リズムを取りながら、それを意識しないとすると、よほどの訓練を積む必要がある。

呼吸についての訓練は、危険をとまなうことがある。人間は無意識に自発呼吸をしているので、呼吸訓練でそのリズムを変えると、他の内臓器のリズムも変化する恐れがある。特に、心臓は呼吸と連動しているので、無理な訓練は試みないように。もし、苦しくなったら、やり方に無理があると判断して直ちに止めなさい。あくまで、自然に楽な呼吸ができるよう心がけること。

全く初歩の段階から始めるとして、呼吸訓練を復習してみよう。

（2）呼吸への意識集中

この段階では、どんなリズムも必要ではない。目を閉じて、どのような努力も緊張も伴わず、いつものように息を吸い、吐く。そして、息を吸い、吐くことに心を集中しなさい。貴方の心を、貴方が息を吸い、吐くことに注ぎ、静かに観察しなさい。意識を、呼吸の上に当て、誰か見知らぬ他人ではなく、正に貴方自身が呼吸しているのを感じとりなさい。

呼吸はときには、浅く、深く。また、速く、遅くなるかもしれない。しかし、それはまだ問題ではない。いつものように、ごく自然に呼吸しなさい。ただ、呼吸が深くなったら、呼吸の動きと変化に気付くようにするだけのことである。そして、他のことはすべて忘れる。周りに何があろうと、目を上げて外の物を見てはいけない。自分の外の環境を忘れさせること。

最初に、この意識集中を5分から10分続けてみる。

意外に難しいことが判るだろう。雑念が次々に浮かんで来て、注意をそらしてしまう。心は一ヶ所に留まっただけではない。しかし、この訓練を注意深く毎日続けていると、呼吸の流れが自然に感じとれるようになる。5分から10分の間で、自分の定めた時間、意識を確実に呼吸に留めることができたなら、次の訓練に移りなさい。

（3）息・霊への集中

目を閉じて、いつものように呼吸をする。呼吸の知覚を意識する。

さて、呼吸が感じとれるなら、吸った息の中に貴方の心意が入るようにする。貴方の心の一部が、呼吸とともに入り、また出る。鼻腔を通り、器官をくぐり、肺の底にまで、くるくると巡回しながら、息・霊が流れ込む。そして、逆の経路を伝って息・霊が流れ出て行く。しばらく、呼吸を内側から眺めるこの感覚を掴むようにする。

心の流入と流出という感覚に慣れたら、その心が貴方を包む広大な大洋、巨大なエネルギーの存在する霊の大洋から、流れ込み、また流れ出して、還流する様子を思い浮かべなさい。呼吸する度に、貴方はその霊の大海から、光り輝くエネルギーの渦を受け取り、そして、返しているのです。

ヘブル語では、「息」と「霊」はともに一つの言葉ルアクで表される。

息を吸うとき、神の霊が貴方のなかに入ってくると、意識しなさい。

聖霊（ルアク・ハ・カドシュ）が携えてくる聖なるエネルギーが肺を満たすと考えなさい。体の中の汚れたものは、息が入ると同時に溶かされ、肉体は内側からリフレッシュします。

息を吐くとき、息・霊の輝くエネルギーで溶かされた、自分の内にある不純物、恐れ、消極的感情などのことごとくを吐きだしている、と想像します。

生命そのものである神の霊を吸い、身の内にある一切の汚れを吐き出す。このプロセスを通じて、貴方の全身が光彩を放ち、生気を帯びてくるのを、自分の目で見てください。また、その姿を強く想像してください。

できる限り、この内側から輝く自己の姿を保ち続けます。

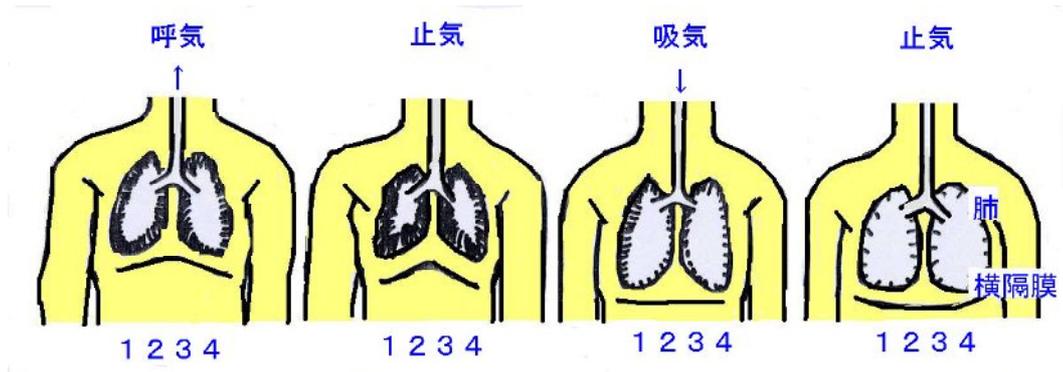
抵抗なくこの呼吸によって輝く自分を想像できるようになれば、次の訓練に移りなさい。

(4) リズムへの集中

ヨガの行法では、様々な呼吸法があるが、我々が基本とする呼吸法は唯一つである。それを、四拍呼吸法という。

その仕組みは簡単だ。即ち、四つ数える間息を吐き、四つ数える間息を止め、四つ数える間に息を吸い、また四つ数える間に息を止める。この繰り返しだ。

ディオン・フォーチュン系の結社では、4-2-4-2のリズムを教えているし、6-3-6-3や、さらに非現実的なリズムを推奨している団体もあるが、ここでは「黄金の夜明け」団の響みに倣い、4-4-4-4を実践しよう。



馴れない内は止息の四拍間が苦しい。しかし、絶対にすべきではないことは、口を閉じ、真っ赤な顔をして息を止めることだ。無理に「息を保とう」とすると、肺やその他の呼吸中枢を傷付けることになる。息を止める正しい方法は、喉や口を開き、口から横隔膜までの間がひとつつながりの袋になるようにして、横隔膜を上一杯に持ち上げる、または下一杯に引き下げたままの状態呼吸を止めることだ。従って、息を吸って止まった状態で胸を鋭く叩くと、空気が肺から漏れる。蓋をするものが無いからだ。

最初の内は、4、5分繰り返したら平常の呼吸に戻してみる。「1、2、3、4」の数は心のなかで数え、自然にリズムが保てる長さにする。繰り返して訓練していると、自分に合ったリズムがつかめてくる。呼吸の訓練は決して急いではない。一度に無理をせず、なるべく多くの機会を捕らえて行うこと。

(5) リラックスとの複合

椅子に座る。先ず、息を吐く。初めの吐息は四拍でなくとも良い。肺をすっかり空にするまで吐き続ける。肺が空になったら、そのまま横隔膜を持ち上げ続けて四つ数える。口は軽く開いて、身体力を抜く。ゆっくりと空気が喉に滑りこんでくる。四つ数えながら、意識を腹の底（所謂、下丹田のあたり）からスーッと上にあげて、頭頂を弛緩させる。四拍の間息を止める。額、眼球、鼻と弛緩させていく。ゆっくりと吐き出す。肩が沈み、肩の緊張が抜けていく。

すっかり吐き終わった後、又四つ止める。どンドン、上半身からリラックスしていく。静かに吸気が滑り込み、体中の細胞の隅々まで酸素とエネルギーが染み通るようように感じなさい。筋肉の一束、一束が緩み、緊張としこりを消し去っていく。

いきなり出来ないからといって、焦るのは禁物だ。何度も四拍呼吸を実践していく内に、リラックスは完成し、無意識の内に呼吸と併用出来るようになる。意識は透明に、わずかな小石でも波紋を投げるようになる。いよいよ、魔術作業の準備が完了した。

7 位階のサイン

これから教えるサインは、本来ニオファイト位階のサインである。便宜上、0=0の魔術作業を行うためにプロベিশヨナーは、このサインを行うことができる。

0=0が学ぶ位階のサインは二つある。

その第1は、「入場者のサイン」または「ホルスのサイン」である。

志願者が手探りで進む姿であり、「ニオファイトの敬礼」とも言う。その作りかたは、両手を脇に垂らし、足は6インチ（約15センチ）離して立つ。これは神の立像である。この姿形のまま意識を頭頂のケテルに集中する。（つまり、王冠を被っているように頭の上に光輝く球を想像する）

足で一漕ぎするつもりで左足を踏み出す。同時に、あたかも頭上の王冠（ケテル）に触れるように両手を上げる。

左足が床に着いたら、手を前方に降り下ろし、指先を真っすぐに手の平を下に、両手と視線が一致するように伸ばす。頭をやや屈め、両手の間から目標を見る。視線と指先から放射されるエネルギーが、前方に注ぎかけられる様子を視覚化し、感じること。

ホルスのサイン



ハーポクラテスのサイン



次に行うのは、「沈黙のサイン」または「ハーポクラテスのサイン」である。

ホルスのサインから引き続き実施する。左足を素早く引き寄せてかかとを合わせる。背筋を伸ばし、左足で足踏みを一回。左手の人差し指を唇の下端中央に触れる。右手は、自然に下げる。このとき、自分がハーポクラテス神の巨大な立像となり、水蒸気に包まれてそびえ立つ様子を想像しなさい。

「ホルスのサイン」が、意志力の放射、または攻撃に用いられるのに対し「ハーポクラテスのサイン」は防御に用いられる。

8 日 拝

(1) 日拝の意味

1日を決定するのは太陽の運行である。魔術師は、この太陽が特定の位置にあるときに、規定された礼拝を実施し、自己を太陽の力と同化する。この小儀式を日拝という。日拝を行うのは、プロベイショナーだけではない。意志の強い魔術師は、それを生涯の習慣とする。特に深夜の礼拝は苦痛であるが、これを行うものは十分な対価を得るであろう。

この礼拝は広く世界で行われている。

古代のピタゴラス学派は、旭日昇天を礼拝していた。⁽⁷⁷⁾

アカデメイアの学頭となったプロクロスは、日出、正午、日没時に太陽を礼拝した。⁽⁷⁸⁾

ユダヤ教では、朝課、昼課、夕課として、イェルサレムの方角（宇宙の門としての神殿の方角）を向いて行われた。ミランドラは『旧約聖書』「詩篇」（54章17-19）を引用し、ダビデが最初に歌った「朝・昼・夕の認識」（*matutinae meridianae et vespertinae coginitiones*）と語った。⁽⁷⁹⁾

キリスト教の修道院では、これに加えて睡眠中断を狙った深夜課があった。修行者の健康には重大な影響があるが、睡眠中断は幻覚を励起し、意志を鍛える有効な方法である。

さて、宗教的祈りとは違い太陽の運行に従い各方位に設定された霊的太陽神を礼拝するのが魔術師の日拝である。これを原始的な太陽崇拜だと軽んじてはいけない。物質太陽は「創造された顕現」であり、この礼拝の目的は、物質の背後に横たわる霊性を受容することだ。あなたも「太陽の背後の太陽」を霊的な世界との交感しつつ見詰めていただきたい。

各種技法のうち、代表的なものを紹介しよう。

(2) カバラのアミダー

ここではカプラン師の示した概要だけ述べる。肉体的にも危険であり、安易な省略形式で実践してはいけない。⁽⁸⁰⁾

a 朝課（シャカリス・アミダー）

夜明けから1日の四半分が終わる（概ね午前十時ごろ）までに行う。象徴的浄化のプロセスとして手を洗い、男性は帽子か、頭巾（*ヤムカ*）を被り、他人に邪魔されない場所を選ぶ。両足を揃えて立つ、いわゆる「天使の立ち姿」を取り、心持ち頭を前傾させ、両手を心臓の上に置き祈る。

式文の最初と最後にある。「聖なるかな」（*ハルカ*）を唱えるとき膝を突き、次の「汝の」（*アテ*）を唱えるとき腰を折って礼拝をする。発声の間は目を閉じ、柔らかな声で歌うように唱える。

アミダーは全部で約500語からなるが、初期の賢者はこれを1時間かけて唱えたという。1語約7秒である。これほどゆっくり発声すると高度なトランス状態を引き起こす。祈りの最中はアミダーの式文以外は何も考えてはいけない。また、祈りと視覚化を結合する方法もある。第1は純白の光を視覚化する方法、第2はテトラグラマトンを視覚化する、第3は無そのものを視覚化する。しかし、可能ならばアミダーの式文をヘブル語で視覚化するのが最

(77) イアンブリコス『ピュタゴラス伝』第35章(256) 国文社、2000年、200頁。

(78) 田中美知太郎、水地宗明「新プラトン主義の成立と展開」『プロティノス ポルピュリオス プロクロス』中央公論社、1980年、56頁。

(79) G. ピッコ・デッラ・ミランドラ『人間の尊厳について』国文社、1985年、40、163頁、注39(2)。

(80) Aryeh Kaplan, *Jewish Meditation : A Practical Guide*, New York : Schocken Books, 1985, pp.99-121.

上である。アミダーは十八の祈りからなり、その最初の祈りは次のとおりである。

バルク アテ アトナイ エロヘヌ ウ^エ=エロヘイ アウ^オテヌ
 「聖なるかな汝、主よ、われらが神にしてわが父祖の神よ。
 エロヘイ アブラハム エロヘイ イサク ウ^エ=エロヘイ ヤコブ
 アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神よ。」

ハ=ガトル ハ=キ^ホール ウ^エ=ハ=ノラー エル=エリヨーン
 大いなる、無敵の、恐るべき神、至高の神よ。
 ハ=シト^ト ハ=カル モシエウ コネイ ハ=コル
 善をなす者、親切なる行為者、万物の神よ。
 アハバー エビ^テハム エビ^オハイ ガリ ハ=ニ ハ=ニム
 列祖たちを愛し、その子らの子らに贖い主を連れ来る者よ。
 シェル シェム ウ^エ=アハバー
 その名によりて、愛をもて。
 メルク オツェル モシア ウ^エ=マゲン
 王、助け手、救い手、そして楯よ。
 バルク アテ アトナイ マゲニ アブラハム
 聖なるかな汝、主よ、アブラハムの楯よ。」(第1の祈り)

この第1の祈りから第3の祈りまでは、神の賛歌の形式を取る。続く第4から第17の祈りまでは嘆願の形式を取り、最後の第18は再び賛歌である。

アミダーの部分部分で、腰を折り曲げる礼拝をすることは先に述べたが、これに関連して『タルムード』に興味深い記述がある。すなわち、「礼拝せずにアミダーを唱えると、その者の背骨は蛇になる。」と書かれている。アミダーには、後に第19番の祈りが付加されたが、祈りのひとつひとつを直立した人間の脊椎骨に対応させると、第18番目の巨大な仙骨の下に退化した尻尾を支える尾骨が第19番目の脊椎骨としてぶら下がる様と奇妙に符号する。

衆知のとおり、この小さな骨は蛇火(クダリーニ)の潜む場所と言われている。

b 昼課(シカー・アミダー)及び夕課(マリガ・アミダー)

内容は朝課と全く同じである。昼課は正午から日没まで、夕課は日没から夜明けまでに行う。

(3) 魔術の日拝(リガルディー版)

さて、次に魔術師の行う一般的な日拝について考察してみよう。そのサイクルは、下表のとおりである。どの方法を使用しても良いが、可能ならば『レシュの書』の技法に挑戦してもらいたい。これが最も基準となる日拝の技法である。

時期	方向	礼拝対象	内意
夜明け	東	ラー	力強く昇る太陽
正午	南	アハトール	烈しさの極みの太陽
日没	西	トゥーム	闇下りを開始する太陽
深夜	北	ケペラ	沈黙の隠れた太陽

ここからは魔術師の日拝を記述する。最初に示したイスラエル・リガルディーの方法は、『靈的啓発の十二段階』に解説されたもので、後述するアレスター・クロウリーの『レシュの書』の簡約版である。⁽⁸¹⁾しかし、魔術修行を開始したばかりの初心者には、この方法が良いかもしれない。

a 夜明けの礼拝

東に向かい登る日を浴びながら次を唱える。
「聖なるかな、汝、宇宙の主よ。
聖なるかな、汝、自然の造らざるものよ。
聖なるかな、汝、広大にして強大なるものよ。
光と闇の主よ。」

b 正午の礼拝

南に向かい太陽を仰ぎつつ次を唱える。
「われに力と靈感を与えよ、おお、生命の主よ。
わが意志と心は汝の力と安定に憧れたり。
恐れは誤りであり、恐怖が存在しないことを確信させたまえ。
怯懦なる者の心には、徳目も存在せざれば。」

c 日暮の礼拝

西に向かい沈む日を浴びながら次を唱える。
「汝に栄光あれ、おお、生命の主よ。
汝のもとより慶びが宇宙の果てまで溢れ出る。
わが精神を高次なるものへ開きたまえ。
わが心を光の中心へ開きたまえ。
わが肉体を聖霊の神殿へ開きたまえ。」

d 深夜の礼拝

北に向かい地下の太陽を想起しながら次を唱える。
「おお、宇宙の主よ。
汝が光をわれに照らし、暗黒を払いたまえ。
わが高次の天才の助けを授けたまえ。
世界の生命と光の中核たる
汝が栄光の玉座を現出せんがために。」

(81) Israel Regardie, *Twelve Steps to Spiritual Enlightenment*, York Beach : Samuel Weiser, 1975, pp.11ff.
(最初期の版から引用した。改訂版「One Year Manual」の記載はクロウリー版の礼拝に変更されている。)

(4) 魔術の日拝（クロウリー版）

『レシュの書』⁽⁸²⁾に示された日拝の方法は、本格的な魔術修行を開始し、それが生涯続く者たちが行う方法である。クロウリーの『神々の春秋分点』には、関連する神の召喚の式文が載っている。例えば、次のような章句である。⁽⁸³⁾

「汝が名前ラーにより、われ汝を召喚す、太陽の鷲よ、栄光の神よ。
汝が名前ハルマキスにより、われ汝を召喚す、輝ける夜明けの若者よ。
汝が名前マウにより、われ汝を召喚す、真昼の太陽の獅子よ。
汝が名前トゥームにより、夕べの鷲よ、日没の深紅の輝きよ、われ汝を召喚す。
汝が名前ケペ＝ラにより、われ汝を召喚す、真夜中の太陽の支配者よ。」

この礼拝においては、太陽の変化に同調すること、魔術の四大に同調すること、宇宙そのものに同調し、しかして神聖と合致することを目的としている。各礼拝のなかに（ ）で示した四大の視覚化／意識変容については、十分に慣れてから行うこと。

a 日出前の早朝、東の空が白み始める頃起き出して、東を向く。

夜明けの光、すなわち日輪が地平線に姿を現す直前の黄金の輝きを全身に浴びながら、位階のサイン（0=0は入場者のサイン）を行う。（このとき自分の身体に黄色の光が染み込んでいく様子を視覚化し、「風」の性質、すなわち熱と湿が満ちていく様子を感じなさい。）

太陽を礼拝しつつ、大声で次の祈祷文を唱えよ。

「汝に敬礼せん、昇り行くラーよ。汝に敬礼せん、力強きものよ。

太陽が上るとき、帆舟に乗りて天界を旅するものよ。

タフティは、舟首に立ち輝けり。ラー＝ホールは、雄々しく舵を握れり

汝に敬礼せん、夜の住居より」

次に、沈黙のサインをなせ。

引き続き、個々の礼拝祈祷を行ってもよい。

例えば、「黄金の夜明け」団では南東のTtoumathphとされたトゥアマウテフなどに。

「汝に敬意を捧げん、トゥアマウテフよ。麗しき東天の神殿高く輝けるものに敬礼せん。」

ANET-HRA-K TUAMAUTEF A XU HER TEPT NETER NEFER EN PET ABETET

また、関連する瞑想（『黄金の夜明け魔術全書』のセオリカス瞑想など）を組み合わせても良い。

b 正午（太陽正中時が理想的、不明なら12時）に、南を向く。

その軌道の最頂部を走る太陽の熱と光を全身に浴びながら、位階のサインを行う。（このとき自分の身体に赤の光が染み込んでいく様子を視覚化し、「火」の性質、すなわち熱と乾が満ちていく様子を感じなさい。）

太陽を礼拝しつつ、大声で次の祈祷文を唱えよ。

「汝に敬礼せん、凱旋せるアハトールよ。汝に敬礼せん、美の女神アハトールよ。

太陽の滯のいと高きとき、帆舟に乗りて天界を旅するものよ。

タフティは、舟首に立ち輝けり。ラー＝ホールは、雄々しく舵を握れり

(82) アレイスター・クロウリー『魔術：理論と実践』下巻、国書刊行会、1983年、269-270頁。

(83) Aleister Crowley, "GENESIS LIBRI AL", in *The Equinox of the Gods*, Scottsdale : New Falcon Publications, 1991, p.81.

汝に敬礼せん、朝^{あした}の住居^{すまい}より」

次に、沈黙のサインをなせ。

引き続き、個々の礼拝祈禱を行ってもよい。

例えば、「黄金の夜明け」団では北東のAmeshetとされたアムセトなどに。

「汝に敬意を捧げん、アムセト。麗しき南天の神殿高く輝けるものに敬礼せん。」

ANET-HRA-K AMSET A XU HER TEPT NETER NEFER EN PET RESI

また、関連する瞑想（フィロソファス瞑想など）を組み合わせても良い。

c 日没時に、西を向く。

夕焼けの真紅の炎を全身に浴びながら、位階のサインを行う。（このとき自分の身体に青の光が染み込んでいく様子を視覚化し、「水」の性質、すなわち冷と湿が満ちていく様子を感じなさい。）

太陽を礼拝しつつ、大声で次の祈禱文を唱えよ。

「汝に敬礼せん、沈みゆく^{ほぶね}トゥームよ。汝に敬礼せん、快樂^{けらく}の縁にあるトゥームよ。

太陽の下りゆくとき、帆船^{おもて}に乗りて天界を旅するものよ。

タフティは、舟首^{おもと}に立ち輝けり。ラー＝ホールは、雄々しく舵を握れり

汝に敬礼せん、日^ひの下^{もと}の住居^{すまい}より」

次に、沈黙のサインをなせ。

引き続き、個々の礼拝祈禱を行ってもよい。

例えば、「黄金の夜明け」団では南西のKabexnuvとされたケベセンヌフなどに。

「汝に敬意を捧げん、ケベセンヌフ。麗しき西天の神殿高く輝けるものに敬礼せん。」

ANET-HRA-K QEBHSENNUF A XU HER TEPT NETER NEFER EN PET AMENTET

また、関連する瞑想（プラクティカス瞑想など）を組み合わせても良い。

d 深夜（正中時の12時間後、または午前0時）に、北を向く。

地底の道を進む見えない太陽の光を全身に浴びる様子を想像しながら、位階のサインを行う。（このとき自分の身体に緑の光が染み込んでいく様子を視覚化し、「地」の性質、すなわち冷と乾が満ちていく様子を感じなさい。）

太陽を礼拝しつつ、大声で次の祈禱文を唱えよ。

「汝に敬礼せん、隠されしものケペラよ。汝に敬礼せん、沈黙^{ほぶね}のうちにあるケペラよ。

太陽が真夜中の道^{おもて}をゆくとき、帆船^{おもと}に乗りて天界を旅するものよ。

タフティは、舟首^{おもと}に立ち輝けり。ラー＝ホールは、雄々しく舵を握れり

汝に敬礼せん、夕^{ゆふ}の住居^{すまい}より」

次に、沈黙のサインをなせ。

引き続き、個々の礼拝祈禱を行ってもよい。

例えば、「黄金の夜明け」団では北西のAHEPHIとされたハピなどに。

「汝に敬意を捧げん、ハピ。麗しき北天の神殿高く輝けるものに敬礼せん。」

ANET-HRA-K HAPI A XU HER TEPT NETER NEFER EN PET MEHTET

また、関連する瞑想（ジェレイター瞑想など）を組み合わせても良い。

(5) 魔術の日拝 (O::S::V::による簡易法)

魔術団体O::S::V::の儀礼及び魔術理論を記述した『魔術哲学』に次の方法が記述されている。⁽⁸⁴⁾

a 朝の礼拝 (日出前後)

「汝に敬礼せん、昇りゆくケペラよ。
汝に敬礼せん、ヘル・クフティ ケペラよ、汝自身の顕現の創造主よ。
汝が朝の舟を駆るとき、風は汝が心臓を楽しませり。
日の境界に於いて汝が美はわれの前にあり。
おお、生ける神、我魂は汝こそわが永遠の主なりと主張せり。
汝に敬礼せん、昇りゆくケペラよ。
ヘル・クフティ・ケペラ、汝に敬礼せん。」

b 夕の礼拝 (日没前後)

「汝に敬礼せん、沈みゆく美しきテムよ。
テム ヘル・クフティよ、汝が光線はわが目に強く輝きたり。
汝が夕べの舟に乗りていや進むとき、放浪える星々は汝に唄えり、
見張りの星々は無条件に汝を称えん。
日の境界に於いて汝が美はわれの前にあり。
おお、生ける神、我魂は汝こそわが永遠の主なりと主張せり。
汝に敬礼せん、沈みゆくテムよ。
テム ヘル・クフティ、汝に敬礼せん。」

(84) 初期のハードカバー本 (全5巻) とソフトカバー本 (合本全3巻) があるが入手しやすい後者を示す。
Melita Denning And Osborne Phillips, *The Foundations of High Magick : Volume 1 of The Magical Philosophy Series*,
St. Paul : Llewellyn Publications, 1991, p.288.

9 瞑想とは何か

我々はカバラの実践を行っているので、瞑想についてもカバラの視点から考察してみよう。本来、瞑想とは東洋の概念であり、ユダヤ教には完全に一致する言葉はない。本来、瞑想は「聖霊」（ルアク・ハコデシュ）を得る手段である。その観点からユダヤ教徒は、瞑想を名付けてきた。故アレイ・カプランの研究によると、ヘブル語で表現された瞑想に類似する概念は次の四つである。

カバラの概念	その意味	現代西欧の概念	その意味
עמידה	アミダー 日々の祈祷	Prayer	プレーヤー 祈り
כונות	カヅァノース 指向性のある意識	Concentration	コンセントレーション 集中
התבוננות	ヒトボネヌース 自己理解	Contemplation	コンテンプレーション 観想
התבודדות	ヒトボドドラー 遮蔽	Meditation	メディテーション 瞑想

第2神殿時代の「大集會^{ハフネセツト・ハグドラ}」において、「戦車の技」などの高度な密儀は、一般大衆から遠ざけられることが決議された。以来、カバラを含めたユダヤ教の密儀の伝統は、「十分に準備のできた弟子に対し、それも一度に一人だけ教えること」とされた。

「祈り」は、この時代の選ばれた弟子たちが祈る姿を示したもので、言葉の意味は「立ち姿」である。一応、現代西欧の概念としては「祈り」と対応させたが、我々が普通に使う意味での祈りではない。もともとは立位で行う瞑想であった。大集會では、18の祈祷文からなる祈りを日に3回行うことが定められた。現代の敬虔なユダヤ人家庭は子供の頃から、この祈りを躡っている。つまり、秘教的意味を教わらなかった一般大衆にとっては、アミダーは日々の祈り（日拝）である。

しかし、祈りの効果を見捨てることはできない。他の雑念を払拭して真剣に祈る習慣を数年間続けると、非常に高度な意識状態を達成することができる。例えば、いわゆる「嘆き」の祈りは、ラビ・シモンも実践したと『ゾーハルの書』に記されているが、それをより高度な、或いは徹底した方法論として追及したのは寡黙なカバラ修法者イサーク・ルリアだった。かれはイエルサレムで三昼夜人交わりを絶ち、深夜に「嘆きの壁」の前に行き激しく祈った。祈りの深い嘆きのなかで忽然と顔をあげたアリは、「嘆きの壁」の上に女性の後ろ姿のイメージを見た。その服装は描写するに耐えないものだった。かれは「シオンよ。シオンよ。われに災いあれ、何という有り様を見たことか」と叫び、その場に失神するまで自分の顔を殴ったり髭や頭髪を引き筆ったりした。その後、壁の前でかれは夢を見た。かのイメージの女性がかれの前に立ち、手を差し伸べ、かれの涙を拭うのを感じた。このようにして、アリはシェキナーの二つの位相を祈りを通して体験した。

本来、秘教的な祈りは力を持っている。ハシディズム運動の祖であるパール・シェーム・トープ（ベシエト）ことイスラエル・ベン・エリエゼル（c1698-1760）は、歓喜と悦楽のうちに祈ることを弟子たちに勧めた「できるだけ熱い想いで祈りなさい、シナゴグの壁や扉が溶けてなくなるように思えるくらいに」。(85)

そして、『黄金の夜明け』を復刻公開したイスラエル・リガルディーは、この祈りの意味を理

(85) ホフマン、前掲書、54頁。

解し、数々の著作において「汝自身を祈りで燃えあがらせよ」と説いた。⁽⁸⁶⁾

再びユダヤ教カバラの技法に戻ると、有名な「シェマー」などは、その響きだけで、空間にシェキナー（の霊気）を呼び降ろす。両手を洗ってから、次の言葉を抑揚をつけて唱えてみると良い。（神聖名を唱えるときは、不浄の場所、物を遠ざけること。）

ShMO I ShRAL I I ALHINV I I AChD BRVK ShM
シェマー イス・ロー・エル アト・オ・ノイ エー・ロー・ハイ・ヌー アト・オ・ノイ エイ・カト^ト ハル・ク シェム
「聞け、イスラエルよ。 われらが主は唯一なり。 その名に祝福あれ。」

KBVD MLKVThV LOVLM VOD ADNI HV HALHIM
カホ^ト マル・クー・トォー ラ・オイラム ウァ・イト^ト アト・オ・ノイ フ ハ・エロ・オ・イム
栄光の御国は永遠に、 主こそ神なり」

また、ユダヤの文献の中で、一般的な、つまり広い意味での瞑想に近い表現で使われるのは、「意識の指向性」である。これは、「集中」、「感情」、「献身」などの意味を持つ単語だが、「照準する」(יָוָו) という動詞から発した言葉で、「照準すること」つまり、「指向性のある意識状態」を示す。儀式において、一挙手一投足に意識を集中する瞬間もカヴァナーである。カヴァナー瞑想、יָוָו (カヴァノース) は儀式の内的径路沿いに精神を動かすとき用いられる。ゲロナのラビ・アズィエルが著した『初期カバリストのカヴァナーの門』という教科書には、幾多の光の層を用いる繊細な瞑想法が示されている。後に一般化したカヴァナーの技法は、マントラを利用した日々の祈りである。現代西欧において、敢えて同様の方法論を尋ねると「意識集中」であるが、本来は瞑想であることに代わりはない。

次の「^{ヒトボネヌース}自己理解」は、モーゼス・マイモニデスが唱えた方法だ。1枚の木の葉を眺めると、普通に眺めれば何の変哲もない一葉でも、この葉を通じてより高次の意識レベルへの到達や、深い自己意識の獲得に用いられれば、それは自己理解の径となる。それは言い換えると「被造物」により「創造主」に辿り着こうとする試みである。ヒトボネヌース瞑想は、どんな対象にも集中する。石でも、木の葉、花、または抽象概念でさえ瞑想課題になる。瞑想者は課題で心を満たし、課題に集中することにより、自己を深く理解していく。いわば、瞑想は鏡を見るようなものである。それ故にこの技法を「予言者の鏡」とも呼ぶ。瞑想者が、この鏡を覗いて神の火花を見るならば、神性との交流に成功したのである。物やイメージに集中して見るこの状態は、現代西欧の瞑想区分では、「観想」に近い。イグナチオ・ロヨラの観想も、テーマを追及していくと神との交流に導かれる。

『大ユダヤ百科事典』を覗くと יָוָו הַתְּבוּנָה は Meditation と訳されている。また、「瞑想する」は、יָוָו הַתְּבוּנָה (ヒトボデード) である。この単語は、「遮断されること」という意味の יָוָו (バダド) に由来する。従って、ヒトボデドゥースの意味は「遮蔽」(Annihilation) である。

これはある意味で極めて特殊な意識状態を表現する。それは自己を総てのものから遮断隔離することを意味する。この遮断隔離にも、「外部との遮断」と「内部との遮断」がある。「外部との遮断」を行うためには、荒野、森、洞窟などに行き、他の人間存在に煩わされない状態になれば良い。タンナイム期には、洞窟の賢者が数多くいた。人間社会と縁を着ることが、修行の第1歩「外部との遮断」である。今日の魔術師も、特別な瞑想行に入るとき6ヶ月間の「魔術的隠遁」を行うことがあるが、過去の修行者は何年という単位で大掛かりにこれを行った。

次の段階は「内部との遮断」である。そのためには、全ての外部感覚を切り離し、忘却し、遮断し、終には思考さえも遮断して全くの無に移行しなければならない。つまり、ヒトボデドゥー

(86) Israel Regardie, *Foundations of Practical Magic*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1979, p.153.

スは、「精神が遮断隔離され、どんな感覚も、思考さえも邪魔しない遮蔽状態にあること」を意味する。

勿論、容易なことではない。ある種のドラッグを飲むと、外的刺激から化学的に遮断されるが、自己のコントロールを失うので、自分の内部の雑音が増幅されて、完全な遮断を達成できない。

また、感覚剥奪が、高次の意識状態を獲得する手助けになることは知られている。現代では色々な手段が開発された。完全暗室や、温塩水浴槽、簡単なものでは毛布で五体をくるんで宙釣にしても良い。しかし、瞑想者は感覚剥奪のためのマシンに頼る必要はない。瞑想の実践を重ねることにより、全ての外部刺激を消し去ることができ、同時に他の思考を消し去り、課題で心を満たすことができる。

ラビ・カーム・ヴィタルは、『聖なる門』の第4門で祈りに関する細々とした注意事項を語ったあと、第5門において次のように語った。

「究極の段階に到達するために、すべての事物や感覚から霊魂を遮断しなければならない。

そうして初めて、霊的な根に密着し、それを認識することができる。しかし、この遮断は、数多くの書籍に語られるような、霊魂が肉体から離脱するような『行為すること』からの完全な遮断ではない。それでは眠りと同じであり、認識されるのは夢でしかない。

人間にルアク・ハ・コデシュが顕現するのは、覚醒状態にあり、その霊魂が肉体の外ではなく、中にあるときである。遮断の意味するものは、思考の完全な除去である。」⁽⁸⁷⁾

(87) R.Hayyim Vital, SHA'REY K'DUSHAH (The Gate of Holiness), in *The Secret Garden*, ed by David Meltzer, New York : Station Hills Arts imprint of Barrytown, 1998, pp.188f.

10 サイコドラマ

(1) サイコドラマの魔術的意義

サイコドラマは、精神的な治療や問題解決支援のために行われるが、次の理由により、われわれ実践魔術師にとっても学ぶ価値のある技法だと考える。

a 儀式実践者 (Ritualist) の技法への応用

現代の魔術団体では、魔術儀式を効果的に実践するためにワークショップ的技法が多く取り入れられている。サイコドラマの技法は、その草分け時代に開発され、さまざまな影響を与えるとともに自ら進化してきた。

舞台の構成に関する考えかたは勿論、儀式に専念させるため、開始前のウォーミング・アップや、儀式終了後のシェアリング、場合によれば茶会を兼ねたレビューなどは、19世紀の黄金の夜明け団の時代にはなかったノウハウである。

b 儀式のなかで噴出する情動等の理解

魔術儀式のなかでは通常体験しない情動の噴出、カタルシスの爆発が起こることがある。それらが、魔術儀式の目的と合致しない場合は、サイコドラマの力学を理解していれば回避することが可能である。

c 神秘劇実践の補助

秘教的な概念を顕教的な場で開示する手段として、古来、神秘劇が用いられてきた。テンブル騎士団のイメージを重ねたゲーテの『メーテルヒェン』などが有名だが、それを研究したルドルフ・シュタイナーの『神秘劇』四部作においては、さらに、登場する形象たちの超感覚的世界への投影と、世界認識の再受肉へと昇華した。

神秘劇は現代の魔術団体でも、しばしば、開催される。その際に、劇場のなかに働く要素を理解するのは大切である。サイコドラマを体験することで、その先に進む端緒を開ける。

(2) サイコドラマの歴史

サイコドラマ (Psychodrama) は、ルーマニア生まれのユダヤ人精神科医ジェイコブ (ヤコブ) ・モレノ (J. L. Moreno 1889-1974) が、1930年頃に創始した集団心理療法の技法である。

かれはウィーン大学で医学と精神医学を学んだ。シェーンベルグの「ファンタジーは、想像力の源泉 (fons et origo) である。」という主張に感銘を受けたモレノは、同地で「自発性劇場」(Stegreiftheater) を主催した。かれは1925年に米国に移住し、ニューヨーク州ハドソン河北部のビーコンを拠点に心理劇を発展させていった。

当初、彼は即興劇を利用したが、後にパフォーマンスの部分を削除し、集団療法に絞った。1942年にモレノは、米国サイコドラマ集団精神療法学会を立ち上げた。3番目の配偶者のザーカ・T・モレノが、心理劇を体系化し、ニューヨーク州・ボートンプレイスにモレノ研究所を開設している。⁽⁸⁸⁾

サイコドラマは、1950年代に松村康平・外林大作らによって日本にも紹介された。

(88) ジョナサン・フォックス『エッセンシャル・モレノ』金剛出版、2000年、19-27頁。

サイコドラマは、神経症や心身症、分裂病などの患者に対して、ある対人的な課題解決を必要とするような即興劇（台本のないドラマ）をグループの中で演じさせ、自己の心の問題（心理的な葛藤、情緒的な煩悶など）を情動的に表現・表出し、即興的に自発性や創造性を発揮して、心の葛藤（＝症状）を解き放し、困難な課題を克服していけるように導いていく治療法として生まれた。

しかし、サイコドラマは、徐々に健常者の問題解決にも適用されるようになった。

演劇のやり方を実際に用いて行うことから、言葉の表現が苦手な人でも、舞台の上で役割分担という形で表現できる。それにより、十分に自分を認知してもらい、他者に理解してもらえる体験ができる。また、社会的な役割から解放されるため、素直な自分を表現でき、メンバー相互のコミュニケーションが豊かになる。

この現実の自分自身から解放され、新しい自分に生まれ変わるというプロセスを通じて問題解決することをねらいとしている。

サイコドラマと同様の技法にドラマ・セラピーがある。これは、演劇を癒しに使おうという試みで、欧米では古くから研究され、様々なワークショップが開かれてきた。サイコドラマと混同されている場合も多いが、両者のねらいは異なる。

サイコドラマのねらいは、参加者の心の問題を演劇空間の中で明確化し、本当はどうしたいか、どうあるべきかを、芝居の上で行わせる事により、実生活でのストレス軽減、或いは態度の変革を図ることである。

一方、ドラマ・セラピーのねらいは、一つの演劇を複数の参加者が作り上げることで、集団生活や、社会生活に対するストレスを解消し、社会適応能力を養うことである。

しかし、現実の技法はかなり類似している。⁽⁸⁹⁾

(3) サイコドラマの定義

ケラーマン (Peter Felix Kellermann) は、モレノ自身がサイコドラマの一貫した定義を怠ったとして、次のような包括的定義を主張している。⁽⁹⁰⁾

「サイコドラマとは、クライアントが、ドラマ化、役割演技、ドラマ的自己表現を通して、自己の行動を継続し、完成できるように援助する精神療法の一つである。言語的、及び非言語的コミュニケーションが用いられる。多くのシーンが上演されるが、たとえば、過去の特別な出来事の記憶、未完成の状況、心の内面のドラマ、ファンタジー、夢、未来の危機的状況への準備、精神状態のリハーサルされていない表現といったものが、今、ここで表現されるのである。これらのシーンは現実生活に近づくこともあれば、内面の精神的プロセスを外在化したものになることもある。もし必要なときには、他のメンバーや無生物の対象などの他の役が演じられることになる。役割交換、ダブル、ミラー、具体化、極限化、独白等のさまざまな技術が用いられる。一般には、ウォーミングアップ、アクション、徹底操作、集結、シェアリング等の諸相が認められる。」

(89) 「このように、日常生活に<似た>状況で即興場面練習などを行うドラマセラピー的なアプローチには、脚本劇でキャスティングをして行う一般的な劇活動では出にくい効果がある。また、個人の内面や実生活をさらけ出すサイコドラマとも違い、ドラマセラピーは現実から距離を置くので、取り組み易く安全で、かつサイコドラマと同じくらいの強力な効果が得られると思う。」(尾上明代『学校教育におけるドラマセラピーの効用』日本演劇学会春季大会講演、2000年。)

(90) P. F. ケラーマン『精神療法としてのサイコドラマ』金剛出版、1998年、27頁。

(4) サイコドラマの基本要素

モレノの用語を用いると、サイコドラマには、次の五つの基本要素（作業コンポーネント）が準備されねばならない。⁽⁹¹⁾

a 舞台 (stage)

サイコドラマが演じられる物理的な空間を舞台と呼ぶ。舞台のデザインは、操作の必要性和一致するように造られる。丸い形と階段は、緊張からの解放を促し、行動の可能性と可変性を保証する。

b 主役 (protagonist)

サイコドラマにおいて、テーマを表現するために選ばれた人物を主役と呼ぶ。個人の問題解決のために行うサイコドラマでは、もちろん当事者が主役になる。そのときは、心に浮かぶまま、自分自身を自由に演じ、自己の世界を描く。

c 監督 (director)

参加者を誘導する訓練されたサイコドラマティスト (Psychodramatist) が監督に就任する。監督は、三つの機能を有する。すなわち、プロデューサー、カウンセラー及び分析家である。

d 補助自我 (auxiliary egos)

サイコドラマのなかで重要な他者（人間ではないときもある）の役割を言う。その役割は、監督の一部であると同時に、主役の人生のドラマを演じる主役の一部としての二つの性格を併せ持つ。

e 観客 (audience)

サイコドラマに関与し、野放しの自然を表現する者たち。かれらも二つの役割をもつ。主役を助ける公衆の意見の共鳴板として、主役がカタルシスを達成し、自らを癒したときは、同時に主役が観客を癒すという主客転倒も発生する。

(5) サイコドラマの構成

a ウォーミング・アップ (Warming up or Warm-up)

ウォーミング・アップは参加者の緊張をほぐし、参加者相互の親近感を増大させる。中隊で行う場合は、親近感については問題ないが、セッションに対する緊張感をほぐす必要がある。身体のウォーミング・アップと心のウォーミング・アップに分割する研究者もいる。

(91) フォックス、前掲書、45-47頁。

(a) 身体ウォーミング・アップ

体のウォーミングアップは、心のウォーミングアップに入る為の準備である。体をほぐして、心もほぐす準備をする。ストレッチ運動、輪になって手をつなぎ歩く、椅子取りゲーム、肩たたき、人間知恵の輪等の簡単なゲームをする場合もある。

馴れてくると必要のない場合もある。

(b) 心のウォーミング・アップ

テーマによっては直接、このウォーミング・アップを始める。

例えば、輪になって、自己紹介をする。テーマに沿った過去の体験談をする等の自ら話させ、心の内面を徐々に開示する方向で心理劇に伴う気恥ずかしさや、気後れ、拒否感を軽減していく。変わったものでは、ウルマンの3段階の夢開放手順 (Three Stages Dream Procedure)⁽⁹²⁾ などがある。

ステージ1：内容及び感情の明確化

ステージ2：感情及びメタファー

ステージ3：ドリーマーの反応

米国のワークショップでは、トランス・パーソナル心理学の影響からか、霊的な儀式を導入する場合もある。その際は、伝統宗教にはかぶらないように、「東のスピリットよ・・・」という祈り (Invocation) の形態を取ることが多い。

この「祈り」(Invocation) は、魔術の「召喚」という意味ではなく、キリスト教圏で式典に神の祝福を祈るために習慣的に行われているもののニューサイエンス版である。

b 実演 (Action or Play)

主役は、テーマに沿って自分の心を開示していく。

心の中にある葛藤や、問題点を物語化し、劇のような物につくりあげていく。

あらかじめ筋書きが決まっている場合もあるが、そのときも主役の心から噴出する物語によって、フレームがどんどん変化する場合がある。

トラウマ解消のためのサイコドラマでは、主役が過去の精神外傷 (トラウマ) の原因となった人物の役を参加者から指名する。これが補助自我である。

そのトラウマの性質によって、父親役、母親役、兄弟役、恋人役、果ては暴力団役なども補助自我として指名される。かれらは「悪役」の補助自我である。トラウマの加害者となった補助自我は、主役が展開していくトラウマの原体験を演じる。

サイコドラマの脇役である補助自我は、主役の心の投影である為、自分の個性を必要以上に主張しない。しかも、主役の意図を読み取り、より主役の要望に近い役になりきる演技力を要求される。

一方、監督はドラマの流れを作る役である。サイコドラマは最初から結末までの筋を決めて実施する訳ではないため、主役が決まったら、テーマに関連する場面、誰がそこにいたかなどを監督が少しずつ主役から聞き出して、その場にいた人物や、物で主役にとって重要だと思われるものの役を補助自我として、聴衆から、主役に選んでもらう。

監督は主役にすべての役を実際にやってもらい。補助自我のセリフはその中で決定する。そうしながら主役の世界を形成していく。

(92) M.Ullman (Editor) and others, *The Variety of Dream Experience : Expanding Our Ways of Working With Dreams* (*Suny Series in Dream Studies*), New York : State University of New York Press, 1999.

ケラーマンは、次のようにサイコドラマの治療的側面を分析した。⁽⁹³⁾

治	情緒的反応：カタルシス	→		
療	認知的洞察：アクション洞察	→	抵	集
者	対人関係：テレ	→		
の	イメージ：アズ・イフ	→		
→				
技	行動：行動化	→	抗	結
術	非特異的：魔術	→		

c シェアリング (Sharing)

実演が終了した後、参加者全員が感想・体験の共有を行う。20分ぐらいが適当である。できるだけ小さな輪になって座る。監督の隣に主役を座らせ、その隣にシェアをする人が交替に座るのが古典的方法だが、緊張させないように、それぞれの場で動かずにやる場合もある。原則として他人の評価や批判はしてはいけない。

まず、補助自我で辛い役を振った場合は、「役おろし」をやってセッションの影響が残らないようにする。

(6) サイコドラマの応用例

a 守護天使

曾野肇氏のサイコドラマの実演例である。かれは非特異的な側面を守護天使になることで強調する。⁽⁹⁴⁾

「ヨーロッパでは<守護天使>と呼んでいるし、日本では<守護霊>とも呼びます。今日は皆さん自身の守護天使になって、雲の上で集会をもつことにしましょう。いいですか、こんな風に雲をかきまぜると地上にいるあなたが守っている人の姿が見えてきます。(立ち上がって、輪のまん中に進みでる。)

『ホラ、あそこでサイコドラマを指導している中年の男性が、私が指導している増野肇という男です。小さいときは弱虫でとても苦労しました。でも、今は、私の導きで何とか一つの仕事をやれるようになりました。今の心配は初老期に入りかけて、身体の健康のことです。やりすぎるところがまだとれないので困っています。』

こんな風に紹介をするのです。あなたが導いている人のその人らしさが出ている場面を雲の中に見せて下さい。では、栗田さん。あなたは栗田さんを見守ってきた守護天使です。あなたの導いてきた栗田さんの姿をみせてください。(こう言いながら、肩に手をかけて少し中央にひきだす。そして、雲をかきまぜる動作をうながす。)

さあ、あなたが導いている栗田さんが見えてきました。あの人がそうですか？

ハイ。

<何をしているところですか。>

一生けんめい歩いています。

<そうですね、どこからどこへ歩いているのでしょうかね。>

自宅から、職場に向かっているんです。

<まじめなんですね。>

(93) ケラーマン、前掲書、92-93頁。

(94) 増野肇『サイコドラマのすすめ方』金剛出版、1990年、143-146頁。

まじめすぎるんです。もう少し手をぬいて自分を大切にするようにとっているんですが、いうことを聞かないんです。・・・

<では、次の人に聞いてみましょう。毛塚さんでしたね。

さあ、雲をかきわけてみましょう。>

ハイ、なかなか見えてきません。

<気流の流れがわるいのでしょうか。もう少し、ゆっくりかきまわして、ホラ、

雲がだんだん薄くなってきます。家や街もみえてきました。

どこに彼はいるのでしょうかね。>・・・」

b リプロセス・リトリート・ワークショップ

これは、米国でサイコドラマなどの技法をADの癒しのワークショップに導入している西尾和美のセッションの方法論から、グリーフ・ワーク（嘆きの過程）を引用する。⁽⁹⁵⁾

グリーフ・ワークでは、失われたもの、なかったものに対して嘆きを表現していくことにより、カタルシスを招致し、儀礼的に自分の心の傷の喪に服す意義をもつ。

● ワーク I : 言えなかったことを口に出す ●

自分の心を傷つけ、現在もその影響があると思われる人たちの写真を用意し・・・写真や絵を見ながら、いままで言えなかったことを言葉にしてみてください。

このワークはとくに安全な時間と場所が必要です。アルコール、薬物などで感情を麻痺してしまわないで行ってください。まわりの人に迷惑がかからないように、誰もいないところでやるか、信頼する人たちと一緒にグループでやるか、またもし心の傷が大きすぎると感じる場合はサイコセラピストに支えてもらいながらやってみるといいでしょう。

はっきりと声に出して言いたいことを言ってみてください。大きな声を出してみると、あとで気持ちがスッキリします。

「お父さんが、お酒を飲んで酔っぱらって帰ってくるから、
私はこわくてしょうがなかった！
いつ怒鳴られるかと思ったら、ごはんものを通らなかったんだよ！
すごくびくびくしていたんだよ！
はずかしくて友だちも家なんかに連れてこられなかったじゃない！
お父さん、あんたはアルコール依存症だよ！
家族の皆をつらい目にあわせたんだよ！
悲しくて、恐ろしくて、毎日泣いて暮らしたんだから！」

(95) 西尾和美『アダルト・チルドレン 癒しのワークブック：本当の自分を取りもどす16の方法』学陽書房、1998年、61-62頁。

第3ヶ月目の瞑想

瞑想課題：マントラ瞑想

今月の瞑想はマントラを利用する。マントラは東洋の概念であり、ヘブル語にも英語にも適当な訳語がない。従って、本稿でも同じ用語を使う。

マントラ瞑想は実に単純である。ひとつの言葉か、文章を選んで瞑想の訓練を行う間それを繰り返すのである。反復の効果はまず、肉体のリラックスとして現れる。十分に集中すれば、肉体は弛緩するが逆に精神は澄み切ってくる。意識が全てマントラで満たされたとき、身体は眠りに似た状態になり、意識は半覚醒半睡眠の不思議な状態に置かれる。

この心理学的プロセスは良く理解されている。今は見かけなくなったが、秒針の刻む音がうるさい置き時計のある部屋で仕事をする者は、最初はその音を不快に感じるが仕事に集中すると、時計の音が聞こえなくなる。人間の脳は反復される雑音を排除する機能を持っている。実際のところ彼は音を聞いているが、注意を払っていないのだ。

もし、マントラを繰り返し唱えるなら、そのマントラは彼にとって反復雑音となり、意識はそれを排除しようとする。しかし、外部刺激とは違いあなた自身が発音する言葉を消去するのは困難だ。あなたは一心にマントラに集中している。そのとき、奇妙なことが起こる。マントラを唱え続ける意志の力と単調な反復を無視しようとする感覚機能が拮抗したとき、あなたの意識のスクリーンの中にある他の思考は無視される。奇麗に消えてしまうのだ。むろん、集中力を妨げるような雑念は時々沸き上がるだろう。しかし、普通の状態と違いそれが長続きすることはない。

この意識状態を達成するのがマントラ瞑想の第1のステップである。

これは全く神秘性のない人間の心理機能である。マントラは「じゅげむじゅげむ」でも良いし、「オープンセサミ」でも構わない。しかし、マントラ自体に神聖な意味があったらどうなるか、あなたはもう1段ステップを押し上げることができる。単に意識の地平線から雑念を消去するだけでなく、あなたが選択したマントラが導く特別な意識空間に飛ぶことができる。

このようにマントラ瞑想は非常に単純で、効果的な技法であるが、唯一精神病の前歴のある人は行ってはならない。現実世界との結び付きがあまり堅固でない人物がマントラ瞑想の世界に入ると、瞬時にリアリティを喪失する恐れがある。これは程度問題なので、指導者と良く相談した方が良いでしょう。

カバラでは、マントラ瞑想は古くから知られていた。「反復」を意味するハガーと呼ばれる単調な音の反復法、ゲルシムと呼ばれる『聖書』の字句を反復する技法が知られている。アリ（ラビ・イサク・ルリア）は『ゾーハル』の字句を使ってこれを行った。そして、続く賢者たちはいずれもこの門を叩いた。なかでもラビ・ナハマンは有名な「宇宙の主」瞑想を行った。「宇宙の主」は我々、魔術師には聞き慣れたフレーズである。

「黄金の夜明け」団の0=0儀式の中でニオファイトの敬礼に関連して、次の章句が用いられたのを覚えているだろう。

「聖なるかな、汝、宇宙の主よ!

Holy art Thou, Lord of the Universe!

聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ!

Holy art Thou, Whom Nature hath not Formed!

聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ! Holy art Thou, the Vast and the Mighty One!

光と闇の主よ!

Lord of the Light and of the Darkness! 」

この冒頭に使われる「宇宙の主」のヘブル語原典は、רִיבוֹנוּ שֵׁל עוֹלָם (リボノ・シェール・オラーム) である。ラビ・ナハマンはこの「宇宙の主」という言葉を連祷した。かれは「宇宙の主」を称えることで、神との交流を果たす門を開こうとしたのだ。また、原文のままでは発音し

辛いため、リボイノイ・シエル・オイロームと節をつけて唱えたと言う。

あなたに示される課題は単純である。

神の座位で座り、次のマントラを15分間唱えなさい。マントラを単調に反復するもよし、節をつけても良い。本来のヘブル語の発音を極端に逸脱しない限り、多少発音しやすい抑揚で唱えるのは構わない。マントラの意味と発音に意識の全てを集中すること。この集中が途切れたら意味はない。集中の続く範囲で、15分が長ければ短くし、足りないければ長くしても宜しい。終了したら集中の度合いと、意識の状態、特別な反応などについて魔法日記に詳細に記録しなさい。

リボ^レイノイ^レ・シエル^レ・オイローム

第1週は、「宇宙の主」 R I B V N V ShL O V L M

ラ^レ・ミレ^レイダ^レー^レ・エロハ^レース

第2週は、「造らざる者」 L A M L I D H A L V H V T h

ガ^レト^レル^レ・ウ^レェ^レシャ^レタ^レイ^レ・エロハ^レース

第3週は、「広大にして無辺の者」 G D V L V S h D I A L V H V T h

リボ^レイノイ^レ・シエル^レ・オール^レ・ウ^レェ^レコー^レシエ^レク

第4週は、「光と闇の主」 R I B V N V ShL A V R V C h V S h K

今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。図書館で読むのも良いが、必読図書については購入することを勧める。

1 必読図書

今月の学習の参考となる著作は以下のとおりである。

ゲルショム・ショーレム 『ユダヤ神秘主義』 法政大学出版局、1985年。

ゲルショム・ショーレム 『カバラとその象徴的表現』 法政大学出版局、1985年。

2 推薦図書

今回は、Web上の文書を多数推薦します。しかし、ダウンロードすることは、読むことにあらず。自分のできる範囲で読む努力をして下さい。

小岸 昭 『離散するユダヤ人』 岩波書店、1997年。

増野 肇 『サイコドラマのすすめ方』 金剛出版、1990年。

Karr, Don. *Note on the Study of Early Kabbalah in English*. 1985, 1995, updated 2002-2012.

Karr, Don. *Note on the Study of Merkabah Mysticism and Hekhalot Literature in English*. 1982-5 updated 1995-2012.

Karr, Don. *Note on the Editions of Sefer Yetzirah in English*. 1991, 1994, updated 2001-2012.

Karr, Don. *Note on the Zohar in English*. 1985, 1995, updated 2001-2010, revised 2011-2012.

Karr, Don. *The Study of Christian Kabbalah in English*. 1995-2007, revised, enlarged & updated 2007-2012.

Karr, Don. *The Study of Christian Kabbalah in English : Agenda*. 1995-2012.

Karr, Don. *Note on the Study of Later Kabbalah in English: The Safed Period & Lurianic Kabbalah*. 1985-2005, revised and enlarged 2006-2012.

上記、Don Karr の文書は下記サイトから入手できる。

<http://www.digital-brilliance.com/contributed/Karr/Biblios/index.php>

第3ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に入力しなさい。入力した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 何故、カバラが魔術の中核となっていたか思うところを書きなさい。
- 2 マサースは訳書『ヴェイルを剥がれたカバラ』の序文において、2ページにある四つの分類を述べた。第3と第4の分類の違いはどこにあると思うか。そして、何故このような違いが生じたのだろうか。
- 3 セフィラから次のセフィラへの「流出」は、水が器を満たして縁から溢れでる姿で描写されている。ビナーからケセドへ流出する水が、深淵に失われないようにするのはダースのひとつの役割である。さて、ある種の深淵であるパロケトの役割は何だと思うか。
- 4 呼吸が人間の精神と肉体を強く支配する理由は何だと思うか。
- 5 ニオファイトの敬礼は、意志力の投射である。視線と指線をそろえる理由は何か。
- 6 日拝を1日4回行う理由は何か。
- 7 ヒトボデドゥースが真の意味での瞑想だとしたら、瞑想の目標と目的は何か。